

# 南米派遣日本陸上選手団(1933年)の足跡と遠征の成果

曾根 幹子

## Activities during the Japanese Athletic Team's 1933 Tour of South America and the Tour's Outcomes

Mikiko SONE

This study examines the Japanese athletic team's 1933 tour of South America, which was part of the pre-war Japan-Brazil sport exchange history, despite being seldom reported in Japan. This paper examines the activities that occurred during this six-month tour, in order to historically assess its outcomes.

The tour was the first official visit of a Japanese sport team to South America. However, details about the athletes' performances during the tour cannot be obtained from foreign ministry records. Likewise, there are very few historical assessments of the outcomes of the tour.

In particular, the tour became a catalyst for Japan-Brazil exchanges via athletic competitions, which are considered to have had a significant impact on sport in both countries, even to this day. Nonetheless, the tour remains a relatively ignored subject in sport history.

This study is significant in that it illuminates a new phase of Japan-Brazil sport exchange history.

### I. はじめに

#### II. 南米遠征の概要

##### 1. 遠征挙行の時代背景

(1)選手招聘とブラジル排日思想

##### 2. 遠征実現までの経緯

(1)ブラジル国内の動向

##### 3. 遠征の目的

(1)三者三様のもう一つの「目的」

(2)選手団派遣と東京五輪(1940年)招致の関係

##### 4. 選手選考をめぐる

(1)選考の遅れ

### III. 日本選手団の足跡

#### 1. 遠征計画と実際

(1)競技会に大統領臨席のペルー

(2)急ぎのチリ滞在

(3)歓迎会続きのアルゼンチン

(4)邦人移民熱狂のブラジル

#### 2. 選手の別行動

#### 3. 競技会の総括

### IV. 遠征の成果

### V. おわりに

### I. はじめに

本研究は、わが国における日伯スポーツ交流史の中で記述が少なく、全容が定かになっていない「南米派遣日本陸上競技選手団(1933年)」の遠征に関して調査研究したものである。本稿では139日間(出発日を含む)にわたる選手団の足跡を明らかにし、スポーツ交流史の観点から本遠征の成果について検証することを目的としている。

スポーツの「遠征」(本稿では特に海外遠征とする)は、戦前から公式、非公式(個人、学校、企業

など)に多種目(競技)で実施されてきた。中でも企業や大学クラブなどによる小規模遠征は、研究者の関心によって実態が明らかになることが多く、例えば宮内(1974)によるわが国初の海外遠征(米国)を実施した早稲田大学野球部や、古園井(1996)による1930年の八幡製鉄所野球部台湾遠征などの研究がある。

最大規模の海外遠征は「オリンピック」である。日本が初参加した第5回オリンピック・ストックホ

ルム大会（1912年）から今日に至るまで、国民的関心の高い競技会は多くの著書や記述が残され学術研究もなされてきた。しかしスポーツ遠征は競技団体ごと実施されることが多く、特に戦前に実施された遠征は記録や資料が少なく学術研究もわずかしかない<sup>1</sup>。「柔道」に関するスポーツ史研究は比較的多いものの、公式使節団として講道館から初めて南米に派遣された遠征（1939年）も、小史的に記述されているにすぎない（関根 2013）。

「南米派遣日本陸上選手団（1933年）」（以下、遠征または南米遠征）は、日本が初めて南米に向けて派遣した公式選手団であり<sup>2</sup>、その後展開される日本とブラジルのスポーツ交流の先駆けとして、スポーツ史上でも括目に値する遠征だが<sup>3</sup>、わが国では等閑に付されたままとされている<sup>4</sup>。「日本陸上競技選手団」（以下、選手団または日本選手団）の遠征先となったペルー、チリ、アルゼンチン、ブラジルでは、当時、選手団訪問が大きな話題となり、特に日本人の移住が早くから始まり在留邦人数の多かったペルーやブラジルには、一部の選手のエピソードが残されていたり、書物や移民史などで通史的に触れられていたりする。しかし遠征の全容は定かになっておらず、一部には間違った記述も見受けられる<sup>5</sup>。従って本遠征における選手団の足跡の全容を明らかにすることは、日本とブラジルのスポーツ交流の嚆矢を記述することにもなる。また本遠征の成果を探ることは、スポーツによる交流や親善が国や人々にいかなる影響を与えるのかを、歴史的に検証していくために必要な研究であり、ひいては両国のスポーツ交流史に新たな局面を開く意義があると考えられる。

本稿では、一次資料（基礎史料）として外務省記録（I.1.12.0.2-1）<sup>6</sup>及び直接証言者への聞き取り調査データを使用した<sup>7</sup>。また二次資料としては、国内・国外の新聞記事、文献などを用いた。資料引用に際しては、旧字体を新字体に、カタカナは仮名に、仮名遣いは一部現代仮名遣いに改め、引用文の段落を無視した場合は「/」（スラッシュ）を用いた。また戦前の新聞記事には必要に応じて読点を入れ、記事の一部引用で前後の意味がわかりにくくなった箇所は、筆者がパーレン括弧内に注記を加えた<sup>8</sup>。

## Ⅱ. 南米遠征の概要

### 1. 遠征挙行の時代背景

まず、遠征が挙行された時代背景についてブラジルと日本の両社会及びスポーツ界を中心に概観しておきたい。

1930年代は日伯両国とも経済的、社会的に「激動」の時代であった。アメリカ・ニューヨークの株式暴落から始まった世界恐慌（1929年10月から）は、ブラジルにも波及し移民はコーヒー価格の下落に苦しみ、1930年に入っても景気は回復しないまま不況は拡大していった。10月には、ブラジル南リオグランデ州知事だったゼツリオ・ドルネレス・ヴァルガス（Getulio Dornelles Vargas）が、クーデターにより政権を握り（11月収束）、臨時大統領に就任した。経済不況が加速し失業者が増加する中で、「日本人のコロノ（大農場の契約賃金労働者）あがりの移民たちがロッテ（区画）を購入して、自作農クラスのコーヒー栽培者が増え、（中略）小商品生産者の層が形成されつつあった」（山本喜誉司評伝編集委員会 1981）時期でもあった。そのような中で、ブラジル社会にナショナリズムの意識が浸透していった。

1931年、外国人排斥への国民の支持が高まりブラジル新政府による「移民入国制限令」（1月）が実施され、この年の邦人移民数は激減している。4月には、第1回全伯邦人陸上競技大会がサンパウロ市パウリストアノクラブで開催され、7月に在サンパウロ帝国総領事に内山岩太郎が就任した。日本では満州事変（9月）が勃発し、世界恐慌による不況は日本でも深刻化していた。一方、スポーツ界では神宮大会（10月）で南部忠平が走幅跳で、織田幹雄も三段跳で共に世界新記録を樹立し、翌年のオリンピックに国民の期待は高まった。東京市は10月、「1940年国際オリンピック競技大会」（以下、東京五輪）開催の要望を議会で決議した（東京市役所 1939）。

1932年に入るとサンパウロで護憲革命が勃発した（7月）。3か月後に講和が成立したものの、その影響で8月に開催される予定だった、第2回全伯邦人陸上競技大会は無期延期となっている。日本では5月に犬養毅首相が暗殺（5.15事件）され、首相が斉藤実に変更された（外務大臣と兼任）。6月、ブラジル移住者に日本政府から渡航補助（支度金支給）が開始され、7月には外務大臣として新たに内田康哉が就任した。スポーツ界では嘉納治五郎がIOC

総会(ロスアンゼルス)に出席し、IOC 会長アンリ・ド・バイエ・ラツール(Henri de Baillet-Lstour)に正式な招請状を提出し、東京への招致を説明している(7月)。同時期、アメリカで第10回オリンピック・ロサンゼルス大会(以下、ロス五輪)が開催され(7月30日～8月14日)、南部が三段跳で優勝(世界新記録)、走幅跳3位、吉岡隆徳(100m6位)、田島直人(走幅跳6位)、西田修平(棒高跳2位)、大島鎌吉(三段跳3位)など、日本人選手が大活躍をした。ブラジルは自国の代表選手を送り出したが、出発後にブラジルで護憲革命が勃発したため、役員選手のアメリカ上陸が心配されるほどの状況下にあった(日伯新聞 1932.11.17:4)。

1933年のブラジル邦人社会は、ブラジル移住者総数がこの年までに約14万人余となり、中南米諸国では最も多くの日本人が当国で暮らしていた<sup>9</sup>。最初の日本人移民がサントスに入港してから25周年を迎え、6月にはサンパウロ市で「日本移民渡伯25周年記念祭」が行われた<sup>10</sup>。同月、日本陸上選手団が南米遠征に出発し、各地の日本人在留民に熱狂的に迎えられている(11月帰国)。日本では3月に内田外務大臣が国際連盟脱退を正式に通告し、「非常時」の掛け声が高まっていた。

石井(2013)は1933年のブラジル邦人スポーツ界を振り返り、「運動界の黎明期を第一期、野球の大会が盛んになったのが第二期とすれば、陸上競技全盛は第三期と呼べる。このことは争われぬ事実であった」と述べている。当時、邦人スポーツ界の主流は野球から陸上競技に移っており、まさに陸上競技に対する盛り上がりが高潮に達したのが、選手団訪伯の時期であった。一方、嘉納治五郎はウイーンで開催されたIOC会議で(11月)、東京五輪を開催する場合の組織、競技場、経費について報告し、招致に向けて動きだしていた(嘉納治五郎生誕150周年記念出版委員会編 2011)。選手団がブラジル訪問中だった9月には、外務大臣が内田康哉から廣田弘毅に、11月からは重光葵に代わるなど、日本の政治情勢も「激動」にある中で遠征は挙行された。

#### (1) 選手招聘とブラジル排日思想

1933年、ブラジルでは日本からの年間の移民数が史上最高(23,299人)に達していた。その頃からブラジル国内では日本人移民への警戒が色濃くなり、北米で起きた排日の影響は楽観できないほど「日本

移民排撃論が激しさを増していた」(今野・藤崎編 1994:77)。蘆沢(1934)は、当時の排日思想の根柢には、「優生学的に日本人を不可とす。人類型において日本人は非常に劣悪である。日本人は純日本式で伯国に同化せんとする意志がない」などがあるため、「今後の方策としては、日本移民を理解するための有利な材料を、日本領事館や大使館で豊富に用意して一般伯国人、特に議員等に詳細に知らしめておく努力が必要だ」などの考え方や意見を述べている。

日本選手団の離伯後に、サンパウロ総領事だった内山岩太郎は、外務省の筒井潔に宛てた書簡の中で「日本人が人種の劣性であるとか、優生学上何だかという問題に議論の余地がないと各紙共書立てている」(外務省記録 1933.9.25)と、ブラジル国内での排日思想に対してスポーツが有益であったことを報告している。邦人たちは、スポーツが排日意識を払拭した1932年のロス五輪の例に、期待を寄せていた。

昨夏、ロサンゼルス大会では(日本人選手が)棒高跳、走幅跳、三段跳、水泳、乗馬で断然群を抜き欧米先進国の選手を顔色なからしめたのである。／これあって以来、さすが傲岸な北米人も、日本人侮るべからずして敬意を表すこととなり、排日の急先鋒たるロサンゼルス市民も、いまは日本人に対して「さん」付けを為し、日本人を呼ぶのに何々さんと、日本語の敬語を用いるようになったのは、これ大使の力でもなければ、総領事の力でもなく、また学者、政治家の力でもなく、ただ純情を有すスポーツマンの跳梁活躍が斯くならしめたのであるから、これを思えば、スポーツ程、国民外交に効果あるものは他にないといってもよいのである。(伯刺西爾時報 1933.9.2:1)

スポーツが排日感情の変化に有効だったことは、ロス五輪終了後の9月8日に来朝したアメリカのダグラス・フェアバンクス(Douglas Fairbanks、俳優・映画監督・映画プロデューサー)も、講演で語っている。「オリンピックが開かれる数か月前までは、米国内に満州問題に関連して相当根強い反日感情がみなぎっていた事は事実ですが、この感情は日本選手諸君の2週間にわたる立派なスポーツマンシップによって一掃されると共に、米国は日

本選手を通して新しき日本を発見致しました」(東京朝日新聞 1932.9.9:3)。内山総領事や在留邦人たちも、ロス五輪で「排日気分が除去された」(日本体育協会 1986) ことが、日本選手団の招聘によってブラジルにももたらされると考えていたのである。

ちなみに1930年代はペルーも世界的不況の影響を受けていた。1932年にペルー国内では、失業者救済の名目で「ペルー人従業員八割制法令」が公布され(4月)、「排日記事も漸次激化して重苦しい空気が在留邦人間に立ち込めていた」(今野・藤崎編 1994:240) 時代だった。選手団の歓迎会を開催したりマドリード陸上競技代表団は、「日本国は人類にとって数々の素晴らしい手本を示し、この勇敢にして努力を惜しまない国民が名誉を賭けた厳しい戦いにおいて勝利を取めたことは、よく知られている」(EL COMERCIO 1933.8.3 夕刊・午後版:不明) と挨拶で述べ、現地新聞も排日論はあるものの日本人に対する好意的な記事が目立った。

## 2. 遠征実現までの経緯

日本選手団の南米遠征に関する外務省記録は、1933年1月10日にサンパウロから内山総領事が内田外務大臣に宛てた電信に残されている。先の文面には選手派遣依頼の目的を「本年は邦人渡伯満25年を迎える(中略)。日伯青年の親交及び広く新しき日本宣伝のためこれを実行せしめたく所存(後略)」とし、派遣に対する全日本陸上競技連盟(以下、日本陸連)の意向を確かめ回答するように依頼をしている。同電信の写しには、走り書きで「本件につきサンパウロと前に何事か往復せん旨ありや」と手書きで記され、二重丸が付けられている。つまり本件に関しては公的文書が政府に届く以前にも、日伯関係者間で何らかの非公式な交渉があったことが考えられる。その交渉内容とは何か。以下、国内外の資料をもとに遠征実現までの経緯を明らかにしていく。

### (1) ブラジル国内の動向

選手団が離伯した2日後の1933年9月25日夜、サンパウロ市では「選手団後援会解散晩餐会」が開催された。その席で日本選手団招聘の経緯が語られ、以下のように報道された。

一昨年(1931年)10月に安養寺顕三が、此の

企画を内山総領事へ相談に出かけ、南米駐在帝国官憲並びに外務省筋の運動(働きかけ)は引き受けるからやってみよ、との内山総領事の言葉に力を得て、先に伯国陸上連盟に提議しその賛成を得た、次いで(安養寺は)アルゼンチンへ渡って同地公使館、新聞社外有志の声援を得て同地陸連との渡りをつけ、更に昨年(1932年)7月ロス五輪に出かけ、そこで伯亜両国陸連会長と日本陸連会長(実際は副会長)山本博士並びに当時出場の陸上選手を引き合わせて決行の議をまとめ(中略)、帰国後陸連対選手の間を斡旋し、2年半を費やして6選手の横浜出帆までこぎつけた。ペルー、チリ、アルゼンチン在留官民の後援も、すべて安養寺君を中心にして起されたものと言ってよく、同君は今回事情があって選手と行動を共にしなかったことは、すこぶる遺憾であった。(日伯新聞 1933.9.27:9)

先の記事から考量すれば、安養寺顕三<sup>11</sup>が内山総領事に相談を持ちかけて後、選手団が日本を出発する(1933年6月)までの約18か月の間に、日本政府、各国陸連関係者、選手、遠征先の在留邦人を説得したことになる。

表1は選手団が南米遠征に出発した日から時期をさかのぼり、選手招聘に関係したと思われる日伯陸上界の主要な動きを、外務省記録、新聞記事をもとに、南米遠征実現までの経緯を時系列で整理したものである。太字部分は選手団来伯実現に向けて流れが急展開したと思われる出来事であり、以下5点にまとめた。

1点目は、1931年4月29日の「第1回全伯邦人陸上競技大会」の開催である(サンパウロ青年会主催、パウリスタ競技場)。大会の審判長は安養寺で、大会役員はその後の日系コロニア陸上界で中心的役割を果たした人物で占められている。そもそも大会開催の話が最初に持ち出されたのは1926年にさかのぼる。スポーツマンである安養寺氏と知り合いだった平野実が日系コロニアを統率する機会をと持ちかけ、安養寺が「若い者が多いことだし、全伯的な陸上競技大会を」(パウリスタ新聞 1986.6.21:6)と提案をしたことがきっかけとなった。

2点目は、1931年8月13日の「サンパウロ日本人会役員会」である。会議では、1932年のロス五

輪に派遣される日本人選手の中から、なるべく多数の選手をブラジルに招聘する案が協議され話がまとまった。これ以降、安養寺は経費面での問題を抱えつつも、総領事他有力者の了解を求めるために具体的な行動を起すこととなる(日伯新聞 1931.8.20:7)。

3点目は1931年10月、安養寺が国際陸上競技連盟の支部でもあり、南米競技連盟本部のアルゼンチン陸連を訪問したことである。報道ではそれ以降、「安養寺君の渡亜によって俄然局面急転実現への一途を辿ることとなる。(アルゼンチン陸連では)全南米各国に対して公式の打ち合わせを開く事となり、既に快諾済みのブラジルをはじめとてチリ、ペルー、ウルグアイの諸国を糾合し、今後これが中心となって活躍(活動)を続けることとなり(中略)、ウルシニ氏は直接交渉決定のため近く渡日の予定」(日伯新聞 1931.10.29:7、11.5:7)となった。

4点目は、ロス五輪を視察に行った安養寺がサンパウロの内山総領事に送った、1932年7月17日付の書簡である。安養寺は内山総領事に「来年は植民廿五周年記念なので、選手招聘に尽力してほしい」と正式に依頼している(日伯新聞 1932.9.29:4)。また、アルゼンチン陸連、パウリスタ陸連、日本人選手(織田、南部、吉岡、津田)、日本陸連副会長(兼学連会長)山本忠興などと会い、南米遠征について具体的に協議し無条件で賛成を得たことを「第十回オリンピックへの旅」の中で書いている(日伯新聞 1932.11.4:4)。当初、日本選手団の招聘はロス五輪直後に計画していたが、日本陸連の都合や経費の問題で断念せざるを得なかった。また、ブラジルでは7月にサンパウロ護憲革命が起き、第2

回伯国在留邦人陸上競技大会が無期延期となっていた。大会中止を報じた日伯新聞(1932.9.29:4)には、サンパウロ青年会会合(9月20日開催)で決定した日本選手の南米訪問に関して断念するのではなく、新たに「水上選手も招待したい」<sup>12</sup>ことも含めて内山総領事ほか各関係方面に了解を求めていくことが話し合われている。

5点目は内田外務大臣から内山総領事に宛てた電信(外務省記録 1933.2.18)である。日本陸連は外務省を通じて「目下安養寺が来朝中、ブラジル、ペルー、アルゼンチンより28,000円出す確かな保証を得たので6月20日楽洋丸で派遣したい」と正式に返答をし、これ以降、政府公認のもと遠征計画は具体的に動き出した。

以上のように、自由移民として渡伯した安養寺が日系コロニアの青年たちを統率するための相談を、サンパウロ在住の青年たちから持ちかけられたことが契機となり、各関係者や他国を巻き込みながら選手団招聘実現に至った経緯がみえてくる。安養寺はアルゼンチン陸連との協議も「個人として渡亜した関係上、出来るだけ独力で交渉しました」(日伯新聞 1931.11.5:7)と話し、先の同日同面の新聞にも「一青年安養寺君の独力によって計画された」と記されているように、安養寺は、個人として交渉に関わっていたのである。内山総領事が内田外務大臣に宛てた1933年1月10日付の電信に走り書きされていた「サンパウロと前に何事か往復せん旨ありや」とは、表1に示した内容の交渉が国内外のスポーツ関連団体・関係者間で、1931年から行われていたことであつた。

表1 日本選手団南米遠征実現までの経緯

年月日	内容	主要関係者	その他関係者	資料(報道日)	報道発信国
1931年4月29日	第1回全伯国陸上競技大会	安養寺顕三(審判長)	サンパウロ青年会	パウリスタ新聞(1986.6.21.6)	ブラジル
8月13日	ロス五輪に派遣された日本選手の伯国招聘案まとまる/既に安養寺氏の手元に確実な筋からの通信あり	安養寺顕三	サンパウロ日本人役員会	日伯新聞(1931.8.20.7)	ブラジル
9月	実現性の薄い日本選手招待/経費の割り当て支払方法見解異なる/計画倒れ懸念		サンパウロ日本人会	日伯新聞(1931.9.10.7)	ブラジル
10月	南米競技連盟の了解を得て安養寺アルゼンチン陸連訪問(急転実現へ)	安養寺顕三	アルゼンチン陸連 日本陸連	日伯新聞(1931.10.29.7)	ブラジル
11月	安養寺日本選手招待に関して語る/快諾済みのブラジルをはじめチリ、ペルー、ウルグアイを糾合(10月の報告)	安養寺顕三	アルゼンチン陸連 日本陸連	日伯新聞(1931.11.5.7)	ブラジル

同上	サンパウロ連盟正式招待状を発す / 全経費概算邦貨 14,000 円五等分分担交渉		サンパウロ陸連 日本陸連	日伯新聞 (1931.11.19:7)	ブラジル
1932 年 1 月 22 日	日本陸上チーム南米から招聘 / フィンランド、イタリア両国チームの来朝により実現不可能か		日本陸連	東京朝日新聞 (1932.1.24:3) 読売新聞 (1932.1.24:5)	日本
1 月 24 日	南米各国日本陸上チーム招聘 / 安養寺通じ日本陸連宛に招聘申し出あり / サンパウロ連盟から正式招待状着	安養寺顕三	サンパウロ陸連 日本陸連	読売新聞 (1932.1.24:5)	日本
3 月	日本陸連常務理事会で協議 / 日本連盟他チーム来日計画あり / 現時点決定難しい / 南米立寄り困難	安養寺顕三	サンパウロ陸連 日本陸連	伯刺西爾時報 (1932.3.17:6)	ブラジル
7 月 17 日	内山岩太郎総領事より安養寺の書簡送付 (7 月 17 日付) / 公表は 9 月			伯刺西爾時報 (1932.9.29:1) 日伯新聞 (1932.9.29:4)	ブラジル
7 月 4 日～9 月	日本選手南米遠征の件大賛成 / 安養寺選手村でアルゼンチン陸上陣訪問 / 日本陸連副会長山本、アルゼンチン連盟ウルシニ会長、パウリスタ連盟プリニオ会長とで遠征について協議 / 計画無条件に賛成	安養寺顕三	日本人選手 / 山本忠興 (日本陸連副会長) / 亜陸連会長 / サンパウロ連盟会長	日伯新聞 (1932/9/1～11/17) ※欠損あり	ブラジル
9 月	内山岩太郎総領事より安養寺の書簡公表 (7 月 17 日付) / 来年遠征挙行内定、経費の問題あり / 各地在留同胞の援助待つ / 来年は植民廿五年紀年への尽力願う	安養寺顕三内山総領事	山本日本陸連副会長、亜陸連副会長 / サンパウロ連盟会長	日伯新聞 (1932.9.29:4) 伯刺西爾時報 (1932.9.29:1)	ブラジル
同上	日本選手南米派遣計画日本陸連都合で実現不可能 / 安養寺流れてはいかんとロス五輪で連盟や選手と協議 / 実現は費用経費捻出にあり	安養寺顕三	山本忠興	日伯新聞 (1932.9.15:4)	ブラジル
1933 年 1 月 1 日	第 2 回全伯邦人陸上大会は在伯邦人 25 周年記念 / 日本選手歓迎を兼ねてパウリスタ競技場で開催されるだろう			日本新聞 (1933.1.1: 不明)	ブラジル
1 月 10 日	サンパウロ内山総領事より外務省を通して日本陸連宛に、選手訪問計画に関する日本陸連の意向回答請う	平沼亮三 (陸連会長) / 内山総領事	白鳥敏夫 (外務省情報部長)	外務省記録 (内山総領事→内田外務大臣)	ブラジル
1 月 19 日	ブラジル政府から日本陸上選手招聘 / 今夏日本移民 25 周年記念事業として / 18 日外務省へ斡旋を求めてきた / 陸連副会長山本博士、1940 年五輪目指し大計画立てた陸連初の計画		山本忠興	東京朝日新聞 (1933.1.19:3)	日本
1 月 20 日	選手南米訪問問い合わせの件陸連の計画を教えてほしい / 渡伯満 25 年在留民一同熱望 / 陸連の意向確認したい	内山総領事	白鳥情報部長 平沼亮三	外務省記録 (内山総領事→内田外務大臣)	ブラジル
1 月 28 日	日本選手団南米遠征 / 移民 25 年祭に同胞熱望 / 総領事実現へ奔走 [陸上 8 年計画] (案) 実施 1 年目 / 日本陸連役員決まらず事務処理停滞		日本陸連	読売新聞 (1933.1.28:5)	日本
2 月 13 日	南米遠征実現に努力 / 陸連の新役員決定		日本陸連	読売新聞 (1933.2.14:5)	日本
2 月 18 日	安養寺氏来朝中 / ブラジル、ペルー、アルゼンチンより 28,000 円出す確かな保証 / 選手 6 名、監督 1 名 6 月 20 日楽洋丸で派遣 / 日本陸連、選手派遣に正式回答	内田康哉 (外務大臣) / 内山総領事	安養寺顕三	外務省記録 (1933.2.18)	日本
2 月 21 日	理事会主要事項として南米からの招聘に関し先方に交渉中 / 回答あり次第進行		日本陸連	読売新聞 (1933.2.21:5)	日本
2 月 22 日	南米遠征か日米対抗か / 「8 年計画」初頭の事業 / 対立する両意見 / 在留邦人安養寺氏通じ交渉進行中 / 内部で賛否あり	安養寺顕三	日本陸連 織田幹雄	読売新聞 (1933.2.22:5)	日本

3月2日	在留邦人の最も期待する処 / 初めは多少経費上無理と思われるも実行には大なる困難なかるべしと信じる	内山総領事 内田外務大臣	白鳥情報部長→ 日本陸連平沼会長	外務省記録 (1933.3.3)	日本
3月8日	陸の精鋭をすぐる / 我南米軍遠征 / オリンピック選手揃い・約8名 / 安養寺と日本陸連交渉 / 6月20日横浜港出帆 10月19日横浜着帰朝予定 / 陸地滞在約1ヵ月、10回競技会出場予定		森田俊彦 (日本陸連理事) 安養寺顕三	読売新聞 (1933.3.8:5)	日本
3月15日	資金不足に付、幾分を送金願いたい / 選手の旅程3週間延長願う	内田外務大臣 内山総領事		外務省記録 (1933.3.15)	日本
3月16日	ブラジル、アルゼンチン共に為替管理実施中に付、予め送金困難	内田外務大臣 内山総領事		外務省記録 (1933.3.16)	日本
3月31日	日本選手の渡来、当方期待が大きい	内田外務大臣 内山総領事		外務省記録 (1933.3.31)	日本
4月20日	派遣選手名添付、差し支えないか / できるだけ多くの寄付金を得よう配慮願う	内山総領事 内田外務大臣		外務省記録 (1933.4.20)	日本
5月6日	住吉他4名選手南米訪問決定の件歓迎。織田、南部、殊に西田の内1名を加えてほしい。確定選手の履歴写真郵送願う	内田外務大臣 内山総領事		外務省記録 (1933.5.6)	ブラジル
5月9日	モンテビデオは経費倒れ、開催不可	大森代理公使 内田外務大臣		外務省記録 (1933.5.9)	日本
5月17日	サンパウロ陸連幹部会で選手来訪直に歓迎宣伝に取り掛かる	内山総領事 内田外務大臣		外務省記録 (1933.5.17)	ブラジル
5月24日	選手6月20日横浜港出帆。顔ぶれは5月28日ごろ確定		在南米公使・総領事	外務省記録 (1933.5.24)	日本
5月28日	陸連主催南米派遣10000m選考予選(結果)		日本陸連	読売新聞 (1933.5.29:3)	日本
5月30日	南米遠征一次選考会で5選手決定(南部、住吉、藤枝、大江、朝隈) / 10000m 18日の一般学生戦後発表 / 正式決定6月中旬		日本陸連	読売新聞 (1933.5.30:4)	日本
6月7日	A A U支部と競技開催に関し折衝願いたい	在サンフランシスコ若杉総領事	日本陸連	外務省記録 (1933.6.7)	日本
6月13日	南米遠征選手本決まり / 一行6名(福井、住吉、大鳥、藤枝、大江、朝隈) 1万mは中止 / 南部は個人的都合で遠征不可能		日本陸連	読売新聞 (1933.6.14:5)	日本
6月14日	南米行陸上選手泥縄的にやっとならざる / 南半球への遠征これが初めて			読売新聞 (1933.6.15:5)	日本
6月19日	南米派遣選手に便宜供与依頼	住吉・朝隈・藤枝・福井・大江・大鳥 + 安養寺顕三	在京ブラジル国大使館 / アルゼンチン国公使館 / チリ国公使館 / ベルギー国公使館 / ウルグアイ国公使館	外務省記録 (1933.6.19)	日本
6月20日	今日南米へ / 陸上6選手首途、昨夜盛大な送別会 / 福井選手の召集無期延期、岡山連隊区司令官から19日通達	福井行雄		読売新聞 (1933.6.20:5)	日本
6月20日	楽洋丸にて選手横浜出発 / 南米遠征陸上監督兼選手の福井、住吉の名で声明書を発表	選手6名		読売新聞 (1933.6.21:5)	日本

※太字筆者

### 3. 遠征の目的

内山総領事から内田外務大臣宛の電信（外務省記録 1933.1.10）には、日本選手招聘の目的として以下3点をあげている。1点目は、邦人渡伯満25年を迎え在留邦人の期待が大きいこと。2点目は、日伯青年の親交のため。3点目は広く新しき日本宣伝のためである。

そもそもサンパウロ日本人青年会では1932年ロス五輪後に選手団の来伯を希望していたが、「必要経費の見積が増加する中」（日伯新聞 1931.11.19：7）選手招聘計画は一旦頓挫した。安養寺は翌年の実現を目指し、内山総領事宛に「来年は植民廿五周紀念、尽力の程お願いしたい」（日伯新聞 1932.9.29：4）とロス五輪の視察先から書簡を送っている。また「日本移民渡伯25周年記念祭」に日本選手を招待し、スポーツ日本を紹介することは意義があり、不況時にあるとはいえ、援助しても悔いは残らないだろうと日系新聞も遠征計画を後押ししている。（日伯新聞 1932.9.15：4）。

#### (1)三者三様のもう一つの「目的」

その後、「渡伯25年記念祭事業」という「大義」は各方面に対して説得力を高め、日本選手団招聘は具体性を持ち、動きが加速されていった。内山総領事も内田外務大臣を通して日本陸連に、「本計画は1年以來（1931年から）の企てとして気運も熟し居り、南米各国の青年と新日本の代表的青年と親交の機会を興るには、絶好の方法にして其の実現は南米各地の歓迎するところ（後略）」（外務省記録 1933.3.2）と遠征の意義を示し、同時に政府の理解を求めている。

しかし1933年に入り日本は国際情勢において緊張状態が続いていた。国際連盟総会では、「日支紛争問題に関して、国際連盟と協力せんとする努力は限界に達した」（東京朝日新聞 1933.2.25：2）と宣言し退場している。内山総領事は日本が国際連盟を脱退しても、日伯両国の友好関係に変わりはないことを、以下のように在留民にいち早く伝えている。

（国際）連盟一般の空気は悪化し満州独立不承認に傾き、（中略）帝国政府は最後の手段として連盟脱退を余儀なくされんとしている。（中略）伯国はすでに連盟を脱退し之と全然無関係であり日伯国交の親善は日を追うて固く、新

来移民の数また増加するのみである。（中略）円貨暴落の為、充分の補助は困難となっている。（中略）足でまといにならぬよう希望する。（中略）在伯同胞の固き連鎖により、最後まで日伯親善の関係を維持したい。（日伯新聞 1933.2.23：7）

1933年3月15日（午前5：40）、日本陸連からの伝言として、外務省から内山総領事宛に「資金不足に付き予め費用の幾分を送金願ひ得るや」（外務省記録 1933.3.15）との送金依頼がきた。これに対し内山総領事は、「経費については南米邦人の基礎が未だ薄弱（中略）。経費節約の折なることは、重々承知の次第ながら右何卒貴方においてご後援の上、本計画実現に特別のご尽力を仰ぎたし」（外務省記録 1933.3.15）と、同日午後にははすぐさま内田外務大臣宛に返電している。内山総領事は母国の足でまといにならぬようにと在留民に訴えながらも、円暴落の影響やこの時期まだ充分な寄付金が集まっていない中で、日本陸連からの送金願ひに応えることができず、また安養寺やサンパウロ青年会と約束（外務省筋への働きかけ）した関係上、日本政府に負担願ひをせざるを得なかったのである。

選手団招聘の経費問題が最後まで内山総領事の精神的「負担」になっていたことは、選手がサンパウロを出発した日に、筒井潔（情報部第2、3課書記官課長）に宛てた手紙に垣間見ることができる。内山総領事は選手団招聘の責任から解放され、安堵した心情を以下のように吐露している。

日本が南米と国交を開きてより、南米と国交を通じこれほど大きなセンセーションを起し、しかもその範囲が大衆的であったことはないであろうと思う。殊に在留同胞の力を以て、その大部分の仕事を成し遂げたことは、非常時日本の現代において、まことに愉快に堪えませぬ。（中略）在留民の寄付金が15,000円を突破し、競技収入純益が予定額の5,000円ほどであったことは、降り続いた雨が競技のその日から晴れたのも、天運だと思っております。小生は相当重い責任を果たしたような気がしております。（外務省記録 1933.9.19）

安養寺とサンパウロ青年会は、1931年の第1回



全伯邦人陸上大会を開催した経験から、コロニアの邦人をまとめていく上で、また日本人の精神を在伯青年に伝えていく手段としても、スポーツが有益であることを実感としてもっていた。大会終了後、安養寺は「在留同胞によって（邦人陸上大会）が開催されたことは、将来当国で生活していく同胞に一つの信念、即ち（日本人の）実力が如何に決定的なものであるかを教えたのではないかと思う」（日伯新聞 1931.4.30：2）と、「大会総評」で述べている。さらに安養寺が日本選手団招聘に熱心だった理由は、邦人青年たちの心をつなげる恰好の盛事となるだけでなく、スポーツに熱心な在伯青年たちに日本の一流選手の技術を直接見せ指導を仰ぐことが、コロニアのスポーツ推進をはかり、邦人の競技力向上や陸上界の発展につながると考えていたからである（日本移民五十年祭委員会 1958：8-9）。

一方、日本陸連側は派遣手続きを進める中で、サンフランシスコ滞在期間中（2日間）に、日本人選手を交えた競技会の開催を全米陸上競技連盟（AAU）本部に交渉するよう、外務省を通じてサンフランシスコの若杉総領事に依頼している（外務省記録 1933.5.19）。AAU宛には日本陸連からも直接電報を送付しているが、この提案はAAUと交渉の結果、先の用箋に「ダメとなり」と走り書きで記されており実現していない。日本陸連がAAUとの交渉を依頼した背景には、陸連の強化方針（オリンピック優勝8年計画）の実行があり、南米遠征よりも米国遠征が相応しいとした対立意見派へ配慮したことが考えられる。

以上のように本遠征の目的は、「日本移民25周年記念祭」事業の慶祝使節団としてブラジルに日本選手団を迎え、スポーツによる日伯親善を行うという目的を大義として掲げながらも、安養寺やサンパウロ青年会はコロニアをまとめる手段や邦人の競技力向上のために、日本陸連は「オリンピック優勝8年計画」の初頭の事業として、内山総領事はブラジル国内の排日思想の緩和に期待するなど、日本スポーツ界初の公式選手団による南米遠征は、三者三様のもう一つの「目的」を包含しながら実現していったのである。

## (2)選手派遣と東京五輪（1940年）招致の関係

ところで、日本選手団が南米に向け出発した1933年6月は、国際オリンピック委員会（以下、

IOC）の総会（ウイーン）において、IOC委員として新たに杉村陽太郎（国際連盟事務局次長）が選任されている。日本は嘉納治五郎、岸清一と共に、各国委員割り当て最高の3名のIOC委員を有することになり、「世界スポーツ界におけるその地位の重要性を認められ」（東京市役所 1939）、東京大会招致を目指し活動を始めていた。まさに1940年の東京五輪開催に向け「（日本人IOC委員が）好意的に増員され、招致運動は軌道に乗った」（山本 1982：172）時期であった。では、南米に派遣された選手らは、東京五輪招致に関して何らかの任務を担っていたのだろうか。そもそも東京五輪招致の発端は、1930年6月にさかのぼる。1931年10月に東京市議会でオリンピック招致案が満場一致で可決され、IOCに正式招請状を送り、翌年7月、東京市長の永田はロス五輪開催に先立ち開催されたIOC総会に出席し、ラッセルIOC会長に東京市への招致を説明している。この時点では東京よりも早く、ローマ（イタリア）、リオデジャネイロ（ブラジル）など9か国の立候補が報告されていた（東京市役所 1939）。

東京での五輪開催に関して、選手は遠征期間中に2度触れている。1度目は9月12日午前11時半から開催されたサンパウロ陸連主催の送別会で、福井が選手団を代表して挨拶した際、「来るべき第12回の万国オリンピックは東京で開かれると思っておりますので、またその節は伯国選手と旧交を温める機会もあると確信しています」と述べている。

2度目は、9月15日に先発組（4名）として一足早くリオデジャネイロに到着した福井が、再び選手団を代表してブラジル・ラジオクラブからリオ市民に向かってメッセージを放送した時である。その時、ポルトガル語で通訳したのは同伴した三浦大使館書記だった。福井はブラジル訪問の意義と感謝、両国国民の友誼増進を述べた後、以下のように話している。「来る1940年には東京で第12回のオリンピックが催されますので、その折ブラジルの選手諸君と再開することができれば、私たちの満足に超すものはありません」（伯刺西爾時報 1933.9.20：7）。

東京五輪が正式決定したのは1936年7月であり、選手団が渡伯した1933年6月には日本は立候補を表明したにすぎなかった。福井が「東京でオリンピックが催される」と断言し、リオデジャネイロ市の立候補に触れていないのは、選手団が遠征の途上にあつたためウイーンで開催されたIOC総会の内

容を知らなかったか、東京五輪招致に関する任務を担っていなかったか、またはその両方の理由だったと考えられるが定かではない。

#### 4. 選手選考をめぐる

##### (1) 選考の遅れ

最終派遣メンバーは福井行雄、住吉耕作、大島鎌吉、藤枝照英、大江季雄、朝隈善郎の6名となったが<sup>13</sup>、選考をめぐるには日本陸連側の都合と訪問先の各国日本大使館・公使館から出された要望と合わず、何度か変更がなされ交渉は出発間際まで続いた。

1933年3月、日本の新聞は派遣選手が約8名と報じた(読売新聞 1933.3.8:5)<sup>14</sup>。4月、サンパウロの内山総領事には、派遣選手として「住吉、大島、田島、藤枝、中島」(外務省記録 1933.4.20)の名前が伝えられている。内山総領事からは「当方の希望は、観客との関係上、一行に織田、南部、『殊に』西田(棒高跳)の内1名及び長距離(1500m、10000m)または、マラソンを加えて欲しい」(外務省記録 1933.5.6)と要求が出され、さらに在アルゼンチン・山崎次郎公使からは「是非とも吉岡<sup>15</sup>を加えられたし」、在ペルー・大森代理公使からも、南米最初の遠征を盛況にするために、「南部、吉岡、西田の三選手を増員ありたし」(外務省記録 1933.5.9)といった要望が日本陸連に次々と届いた。派遣が熱望された選手は、前年のロス五輪で活躍し知名度が高く競技収入、寄付金を集めるためには外せない選手であった。後日、日本陸連は派遣可能な選手13名のプロフィールを提出している。

わが国で選手団の南米遠征を最初に報じたのは、1932年1月24日付の読売新聞及び東京朝日新聞である。しかし遠征計画は翌年に持ち越され、「南米行き決まる。／選手の顔ぶれは18日に発表」(大阪朝日新聞 1933.5.13:6)まで期間が空いた。計画実現が遅れた理由は「(日本陸連の)役員が決まらず事務処理が停滞」(読売新聞 1933.1.28:5)したことに対応が遅くなり、ブラジル側に回答できなかったためである。日付は明記されていないが、日本陸連から外務省に送った公信(日本陸連用箋使用)には、「写真が大変遅れて申し訳ありません。6名選手を選ぶつもりです。長い距離の選手の子選みたいな事をする予定ですし、これ以外(先に出した選手リスト)の人から派遣選手が定まるかもしれません」と、

派遣選手の確定ができず、あいまいな返答をしている。

さらに2月13日に新役員が決定した後も、日本陸連が立案した「オリンピック優勝8年計画」<sup>16</sup>の初頭における事業としては、「南米遠征よりも日米対抗(米国遠征または米国招聘)が相応しいとする対立意見が出され、内部で賛否両論が巻き起きていた」<sup>17</sup>(読売新聞 1933.2.22:5)。日本陸連は、5月10日に開催された常務理事会で選手派遣計画の概要を発表している。その際、学生は学業の関係で大島だけで、住吉、南部らの卒業生を主として選手を選考し、出発は6月20日、往復120日(内85日が船泊)、10回の競技会を予定しているが正式決定は28日に発表するとした(大阪朝日新聞 1933.5.13.6)。

同時期、内山総領事をはじめ在南米公使、日本陸連、外務省間では、遠征日程に関する打ち合わせが頻繁に行われていた。選手の乗船日(出発)まで1カ月を切っていたが、日本陸連は未だに派遣選手の正式決定に至っていなかった。選考は5月27日に甲子園で行われる第6回インターカレッジの結果をみてからとし、翌28日午後8時から(大阪金龍館にて)選考会議を開いた後、派遣選手5名を推薦した<sup>18</sup>。日本陸連は28日に正式に発表するとしていたが、この時点でも最終決定とはならず、10000m種目の派遣は中止となった。

遠征先から熱望され最後まで名前がリストに残っていた南部は、都合により派遣は不可能となった。この時点で初めて福井行雄が「監督兼選手」としてあがってきた。福井は出発を目前に控え手続きのため急いで故郷に戻った際に、岡山連隊区司令官から召集令状を受けていることを知り<sup>19</sup>、すぐに召集延期の手続きを執った。これを許可されるか否かに関して関係者間に憂慮されていたが、「19日に同連隊区司令官から召集無期延期の通牒があった」(読売新聞 1933.6.20:5)と報じられている。このことからわかるように、派遣メンバーは「泥縄的にやっ」と決まる」(読売新聞 1933.6.14:5)状態で、派遣選手が正式決定したのは出発1週間前(6月13日)であり、選手らには急ぎの旅支度となった。

### Ⅲ. 日本選手団の足跡

#### 1. 遠征計画と実際

1933年6月19日、東京・丸ノ内ホテルで午後6

時から行われた日本陸連主催による選手団の送別会<sup>20</sup>は、「関係者多数参加し盛大であった」(大阪朝日新聞 1933.6.20:7)。翌20日、選手らは東京駅から午後0時15分発小田原行の列車に乗り横浜に向かった。「選手は紺色の上着、ねずみ色のズボンといういでたち勇ましく、大日章旗を押し立てて」(東京朝日新聞 1933.6.21:2) 楽洋丸(日本郵船)に乗船し、横浜港を午後3時に出帆した。帰国は同年11月5日早朝、太洋丸(日本郵船)で横浜港に到着した<sup>21</sup>。

### (1)競技会に大統領臨席のペルー

南米遠征最初の訪問国ペルーでは、1933年4月30日にサンチェス・セロ大統領が暗殺され、その後、陸軍中将オスカル・ベナビデス(Oscar Benavides)が大統領に就任していた。その約4か月後に日本選手団がペルーを訪問したことになる。当初、バイタに寄港する予定だったが天然痘流行のため上陸は許可されず、8月1日午後、次の寄港地サラベリーに到着した。入港後、選手団は邦人移民、政府関係者(学校体育局長など)、現地スポーツ関連団体(ペルー陸上競技連盟など)の大歓迎を受け、早速、日本領事館で茶会に列席し県知事、市長を訪問している。3日には広島県移民の主催による「日秘陸上対抗競技広島選手歓迎記念」の会がリマ市で開催され、広島県出身の住吉(江田島町)と朝隈(府中町)の2名が出席した。朝隈が保有していた歓迎会の集合写真からは、広島県移民50名が集まったことが確認できる。

南米最大の現地新聞エル・コメルシオ(EL COMERCIO)<sup>22</sup>は、日本選手団の訪問を詳細に報道している。8月4日午後6時、選手団はコメルシオ本社を訪問後、各部署を視察して回った。コメルシオ紙は「友好親善を目的に、南米に派遣した陸上競技使節団のリマ訪問は様々な点で重要な意義を持ち、ペルーのスポーツ文化にとって一つの時代を画する大きな価値を持つことは疑いない。／(中略)ペルー国民が国を挙げて待望する体育文化の向上の基礎となる」(EL COMERCIO 1933.8.3 朝刊:13)と歓迎一色の記事を掲載した。

8月5、6日の両日に開催された「日秘国際陸上競技選手権大会」は国立競技場(芝生のサッカー場)で行われ、初日は10,000人、2日目は13,000～14,000人が観戦し、選手の活躍に惜しみない拍手と声援が送られた。大統領は午後3時15分競

技会に臨席し、大きな拍手で迎えられている(EL COMERCIO 1933.8.7 朝刊:12-13)。競技会では、朝隈(走高跳)が南米新記録(1m95)で優勝したほか、選手らは円盤投げ以外のすべての種目に優勝した。

通常、コメルシオ紙のスポーツ欄は国外のスポーツ関連記事も掲載されており、国内ではサッカーが中心となっている。しかし日本選手団に関しては、日系移民社会の記念事業として選手団が訪問したにも関わらず、再三にわたって記事が載せられ、出迎えなどの呼びかけがなされた。外務省に提出された「南米遠征決算報告書(ペルーの部)」には、支出の内訳に「宣伝費」として1,639.00ペソが計上されている。ペルー公使館、日本人選手の後援会などが新聞社に掲載料を支払い、競技観戦や選手団出迎えの呼びかけを行った可能性も考えられる。ペルーの競技会では、「一般席に陣取った日本人学校の子もたちが小旗を振り大歓声をあげて同胞選手を応援し、同時にペルー人選手の大健闘に喝采を送った」(EL COMERCIO 1933.8.6 朝刊:16-17)とあり、子どもたちの感激した様子が報じられている。競技会終了後、選手団は夜10時にカリャオ港から楽洋丸に乗船し、ペルー南部のタクナ(チリとの国境近く)に移動し、タクナからチリのアリカまでは車で国境を越えた。

### (2)急ぎのチリ滞在

8月11日、アリカに到着した選手団は、サンティアゴ市のロス・セリリョス空港まで飛行機(パナグラ飛行会社)で移動した。当初は、船でアリカからイキケ港を経由してパルパライソ港に向かう予定だったが(南米遠征の乗船切符は横浜-パルパライソ間)、船の移動では十分に練習ができず、15日開催の競技会に間に合わないおそれがあった。

チリ代理公使の玉木勝次郎は、「競技15日挙行決定。楽洋丸『パルパライソ』到着14日にては練習時間なきにつき、積荷皆無の『イキケ』寄港省略したしと同船より願ひ出あり」(外務省記録 1932.8.7)と、外務省に至急の電報で許可を求めている。外務省は「『イキケ』省略は補助金の関係上好ましからざる。アリカで2倍の工夫で急ぎイキケに入港し、出港することと致し」(外務省記録 1933.8.8)と玉木代理公使宛に即刻返電している。しかし選手団一行は、アリカより飛行機に乗り11日サンティアゴに到着した後、すぐに陸軍士官学校などを訪問して

いる。外務省に再度判断を仰ぐ時間的な余裕がなかったと思われる。

13、15日にはサンティアゴ陸上競技大会（フランス競技場）が開催された（14日は休息日）。チリの現地新聞エル・メルクリオ（EL MERCURIO）は、チリ陸連主催で日本選手と国内の優秀な選手との試合が行われることや、日本選手のプロフィールとともに4人のチリ選手を写真入りで紹介している。競技会の様子は「日本人選手の活躍」、「競技会はきわめて友好的な雰囲気の中で行われた」（EL MERCURIO 1933.8.14：10）ことなどを報じている。競技会では、110 m障害南米記録保持者のチリのサリナス対福井、藤枝の戦いに観衆の注目が集まった。玉木代理公使は「本邦宣伝上、予期以上の効果をおさむるを得たり」（外務省記録 1933.8.17）と報告している。初めての日本人選手によるチリでの競技会は盛況であったが、収入と支出に差引不足がでた。これは在留民が負担し、一部はアルゼンチンでの余剰金が回され、更に不足分は日本から立替で送金がなされた。選手団は17日、サンティアゴを出発し汽車（アンデス横断鉄道）でアルゼンチンのブエノスアイレスに向かった。

### (3) 歓迎会続きのアルゼンチン

8月18日夕方、選手団一行はブエノスアイレスのレティーロ駅に到着後、すぐに各新聞社を訪問した。滞在期間中の行事は、在アルゼンチン特命全権公使の山崎次郎が外務省に報告した詳細な記録が残っている。選手らは練習もできないほどの過密日程で予定された行事をこなし、地元のスポーツクラブ（ヒムナシアクラブ<sup>23</sup>、日本テニスクラブ、YMCA、大学クラブ）との歓迎交流会、アルゼンチン陸上連盟の招待によるテアトロ（コロン劇場）での観劇など、手厚いもてなしを受けている（外務省記録 1933.9.7）。日本選手団の訪問は、アルゼンチン陸連と懇意だった安養寺が前年のロス五輪において、アルゼンチン陸連会長（ドクトル・ウルシニレ）、サンパウロ連盟会長（ドクトル・プリオニ）、日本陸連副会長・山本忠興（ロス五輪総監督）の三者で日本選手の南米訪問に関する話し合いの場を設け合意に至っており<sup>24</sup>、アルゼンチン陸連も日本選手団訪問を待ち望んでいた。先の経緯もあり、アルゼンチンではスポーツ関係者間で有益な交流があったことが考えられる。

競技会は8月26、27日の両日ヒムナシアクラブの競技場で開催された。1日目は貴賓席に大統領代理のサロベ侍従武官、警視総監などが臨席し、2日目は藤枝（800 m）が日本新記録、住吉（やり投げ）が南米新記録を樹立した。山崎公使は「日本選手の運動精神と優秀なる技能はアルゼンチン運動界及び社会の一部に良好なる印象を与え、運動による日亜親善の実を挙げたり」（外務省記録 1933.9.7）と称賛した。

ところで選手団が訪問した1933年には、3,665人の日本人がアルゼンチンに渡航していた（今野・藤崎編 1994）。外務省調査部編（1937）によれば、当時のアルゼンチン経済は不況が底入れした状態で、その後、1935年までに漸次に回復している。在アルゼンチン公使・山崎次郎が外務大臣・内田康哉宛てに送った報告では、「遺憾なるは、国際『ラグビー』競技及び競馬に課せられたる競技場、持ち主なる『ヒムナシア』倶楽部員を無料にて入場させたため、入場券売り上げが予想以上に少なかった」（外務省記録 1933.9.7）ことに触れている。先の理由により競技収入は少なかったが、アルゼンチンでは在留民からの寄付金も集まり、競技収入も含めた中から必要経費を引いた差額分でチリの不足分（赤字）を補てんした上に、外務省を通じて日本陸連へ送金し（当時の日本円で1,000円）、残額はブラジルに行くまでの雑費として選手に渡している。選手はこれをもって汽船代及び小遣いなどにあてた。8月30日午前11時、選手団はフランス国船マッシリア号でブエノスアイレスからサントス港に向け出帆した。

### (4) 邦人移民熱狂のブラジル

9月2日午後4時20分、選手団を乗せた船は荒天のため予定よりも遅れてサントスに入港した<sup>25</sup>。在留邦人200名が出迎え「非常な賑わいだった」（伯刺西爾時報 1933.9.6：7）とある。選手らはサントス後援会委員と歓迎ランチの後、自動車でサンパウロ市に向かった。市内に到着すると内山総領事は大多数が出迎えており、代表で住吉がラジオ放送で挨拶をした後、選手団は外字新聞社を訪問した。5日は内山総領事の案内でパラシオ（官邸）にサーレス執務官を訪問するなど、選手らは日本領事館、邦字新聞社、各運動クラブ、日本人会などを訪問し連日歓迎行事をこなしている。

9月6、7日の両日は第2回全伯陸上競技会を参

観し、9、10日はサンパウロ国際競技会に参加した。競技会には陸軍司令官代理カストロ大佐、内山総領事も臨席し、午後2時半に開会宣言がなされた。会場となったクラブ・アトレチコ・パウリストアノ陸上競技場の観覧席は、立錐の余地もないほどの観客で埋まり開設以来の大入りとなった。第1日目(9月9日)は、在伯同胞が最も期待していた大江が棒高跳で3位に終わり「失望」が大きかった。走幅跳では大島が優勝、住吉は2位に入った。1日目は5対1で日本選手団はブラジルに負けている。2日目はブラジル各地より22の運動クラブが集まり、競技は午後2時から開始された。「観衆は両日とも5千人を超え、邦人はその半数以上を占めたほど熱誠ぶりを示し、伯国人また狂せんばかりの熱心さをもって、日本人選手を迎えた」(伯刺西爾時報1933.9.13:1)と報道されている。

今大会で最も注目を浴びたのは、400m障害の福井対パジャリア<sup>26</sup>の闘いだった。結果は南米新記録でパジャリアが優勝し、福井は日本新記録ながら2位となった。福井の敗北を目の当たりにし、落胆する福井を見た朝隈は、負傷のため欠場予定だった走高跳に急ぎよ出場している。「大会期間中、伯国同胞、否、観衆をことごとく感激せしめたのは、この競技であった。(中略)勝たねばならぬ闘いである。1m90に朝隈、カストロ二人の戦い、最後の1回!(中略)、この時満場総立ち、賞賛の嵐が起こる。カストロ3回目を果たさず惜しくも敗れる」(農業のブラジル1933:129)、「内山総領事夫人の手からメダルを受け取るや満場われるような拍手、感激した朝隈はワッと泣き出した」(日伯新聞1933.10.18:7)と、後日、競技場の熱狂ぶりと両国選手の奮闘を称える大会総括の記事が掲載された。現地新聞フォリャ・ダ・マンニャン(FOLHA DA MANHA)でも滞在期間中の活躍などが写真入りで一面に載り(1933.9.3:1、9.10:1.19)、朝隈が足を故障し歩き方がおかしかったこと(1933.9.13:11)などが書かれており、日本人選手への関心が高かったことがわかる。

ところで競技会当日、新聞に「寄付金総額は未だ予定額に達せず一選手一行を後顧の憂いなくらしめざる様に奔走している」(伯刺西爾時報1933.9.9:3)ことが報じられ、選手歓迎後援会が寄付金申し込みの締め切りを更に延期したことを伝えた。しかし競技会で選手の活躍が報じられて以降寄付金申し込み

は増え、最終的に内山総領事は日本陸連に対し邦貨2,947円37銭を支払っている。

ブラジル最後の陸上競技会は、20日にリオデジャネイロのバスコダガマ競技場で開催され高官多数が臨席した。400m障害では藤枝がパジャリアに僅差で敗れたものの力闘をみせ、日伯の両国民が大いに沸いた。22日は海軍の好意で飛行場を見学した後、飛行機で市内見物をしている。23日、選手団は米船デルスール号で離伯、10月11日にアメリカのニューオリンズに到着後、ロスアンゼルスまでは汽車で大陸横断をし、16日大洋丸に乗船しロサンゼルス港を出帆した。

なお、報告書には帰国の際にホノルルに寄港したことは書かれていないが、昭和10年度前半期の汽船定期発着表(横浜マリタイムミュージアム編2004)を参考にすれば、大洋丸はロスアンゼルス—ホノルル間を9日で移動しているの、ホノルルには10月24日に寄港したと考えられる。帰国は11月5日早朝に横浜港着後、選手団は平沼亮三陸連会長の出迎えを受け歓迎会に臨み、午後からは皇居参拝、明治神宮へ帰国報告のため参拝をしている。

## 2. 選手の別行動

ブラジルでは選手らが別行動をとった期間がある。外務省には「(前文略)12日『カンピーナス』市訪問後、一部は『リオ』競技会に参加のため13日発、一部は更に『リベロンプレート』市訪問の上、去る18日『リオ』に向け当地を出発せり」(外務省記録1933.9.20)と報告されているが、9月12日～18日の詳細は書かれていない。日系の新聞には選手の動向を伝える、以下の記事が掲載されている。

選手一行のインテリオール歴訪の予定は、突然リオ市の対抗競技がつまった為変更を余儀なくされ、藤枝選手を除いた5名の選手はカンピーナス訪問、それから住吉選手のみ東後氏随行でリベロン訪問に決し、12日午後3時半それぞれ2台の自動車に分乗してカンピーナスに出発、(中略)午後6時東山農場に到着、少憩の後、山本、宮地氏等の主催の歓迎の饗宴を受け、(中略)12時それぞれ帰聖した。(伯刺西爾時報1933.9.16:3)

藤枝はサンパウロに残り<sup>27</sup>、住吉、福井、大江、

大島、朝隈の5選手は車でカンピーナス市を訪問し、その後、東山農場を訪れ夕食後にテニス、水泳、ボートクラブなどの歓迎会に出席したことは、「農場日誌」<sup>28</sup>で確認できる(図1)。また東山農場の「芳名録」(1933年9月12日付)では、5選手の他にも池田信雄、Yociomi Kimura(木村義臣)が随行<sup>29</sup>していたことがわかる(図2)。夜半には、住吉だけがリベロンプレート市へ直行し、他の4選手はサンパウロ市に戻った。

在リベロンプレート帝国総領事主任の斉藤武雄から廣田外務大臣に宛てた文書によれば、住吉の当該市訪問は在留民からの寄付金の関係上、「単なる形式訪問にして、珈琲耕地見学が主たる目的」(外務省記録 1933.10.10)であった。内山総領事が外務省に報告した「国際日本陸上選手後援委員会決算報告書」には、ブラジル国内での支出(旅費)として「リベロン往復汽車賃(2人分)」が記されている。住吉は「東後サンパウロ青年会会長案内でリベロンプレート市へ、母国選手一行を代表し敬意を表すべく出向く」(伯刺西爾時報 1933.9.16:3)ために、東後一美(サンパウロ青年会会長)を伴い、他の選手と

は別行動をとっていたことになる。住吉が選手団を代表して市を訪問した理由は、翌13日に招待されていたコメルシオフットボールクラブ主催の陸上競技会出場のためである。競技場が芝生だったことや実施種目の関係上、また選手兼監督だった住吉は立場上も適任者だった。東後は通訳、案内を兼ねて随行し現地の関係者への挨拶、引き合わせをしたと考えられる。

9月13日、カンピーナス市から一足先にサンパウロに帰着していた大島、大江、福井、藤枝の4選手は、夜9時ノルテ駅から「南十字星号」でリオデジャネイロに向け出発した。朝隈は16日に開催される「広島県人の集い」に出席するため、サンパウロで住吉を待った。14日、住吉はリベロンプレート市ガタバラ耕作地コーヒー栽培施設を見学した後にサンパウロに戻り、16日夜8時から市内の「富田屋」(トンダヤ)で開かれた「広島県人会の集い」に出席した。そこでは「広島県人のブラジル移民はもっとも多いが、『県人会』を有していないのは遺憾であり、近く地方の有志にはかって具体化させていく」(伯刺西爾時報 1933.9.20:7)ことが決

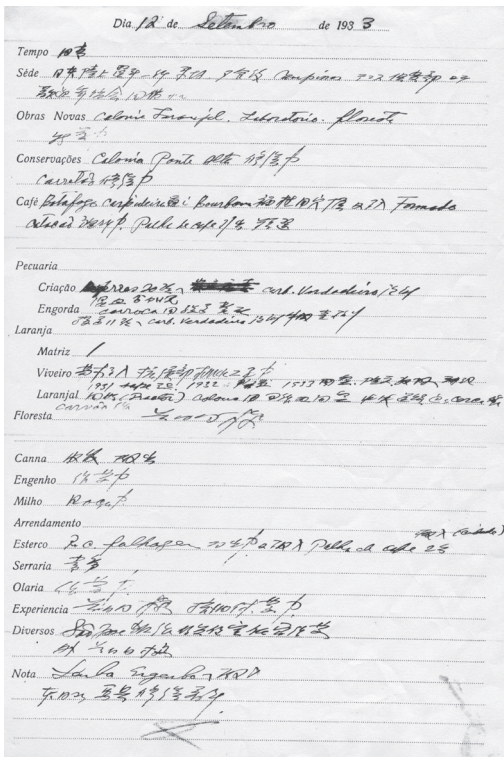


図1 1933年9月12日の「農場日誌」  
(カンピーナス 東山農場史料館所蔵)

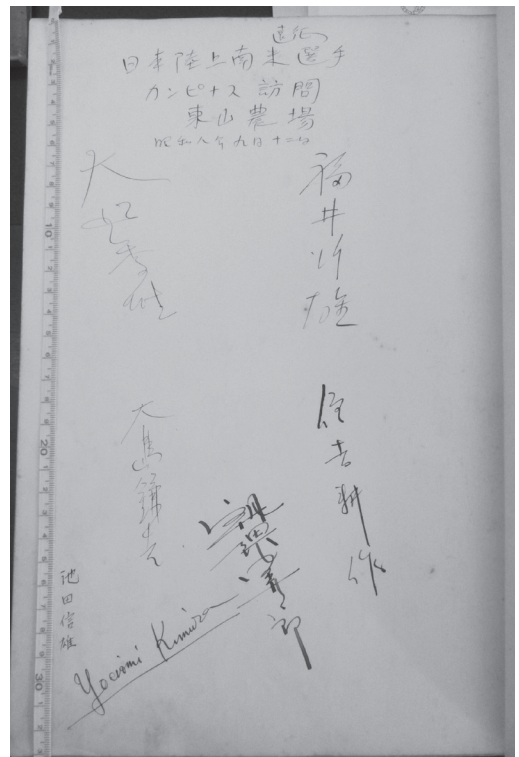


図2 「芳名録」縦33cm×横12cm  
(カンピーナス 東山農場本館保管)

まっている。広島県出身移民たちとの懇親会を終え、翌9月18日朝に住吉と朝隈はサンパウロを出発し、20日朝、リオデジャネイロに到着した。

### 3. 競技会の総括

遠征期間中、選手はペルー国際対抗陸上競技大会(ペルー)、サンティアゴ陸上競技大会(チリ)、ブエノスアイレス陸上競技会(アルゼンチン)、サンパウロ国際陸上大会(ブラジル)、リオデジャネイロ陸上競技大会(ブラジル)、そして住吉のみが参加したコメルシオFC主催の陸上大会を含めると6つの競技会に出場し、さらに第2回全伯邦人陸上大会の参観を入れると、計7回の競技会に参加した。

この内リオデジャネイロでの競技会は、計画はあるものの実際は未定となっていたが、「リオにおける日伯対抗競技の開催については、リオ陸連関係者に種々複雑した事情があったため、(中略)見込みなき有様であったが、大使館、関係者の努力を奏し、11日競技開催が決定し、20日ヴァスコ・ダ・ガマ競技場で盛大に挙行された」(伯刺西爾時報 1933.9.23:3)とある。別行動をとっていた住吉、朝隈は朝方リオデジャネイロに到着した後、午後2時に競技が開始される競技場に向かった(朝隈は足を負傷したため競技を棄権)。選手らは遠征最後の競技会を「ラスト・ヘーヴィで奮戦見事聖市の雪辱を遂げた」(伯刺西爾時報 1933.9.23:3)と日系新聞は賛辞を贈っている。

139日間に及ぶ南米遠征は、船上生活が89日間(各港出発日含む)となり、練習が充分にできない中で

大島、朝隈は足を痛めた。ペルー上陸から帰国まで、訪問国の先々では歓迎会が続き、慣れない異国では身体的負担も大きく、選手らにはタイトでハードな遠征となった。帰国後、大島は本遠征を振り返り、「悪条件と覚えしもの」として以下5点あげている(大阪朝日新聞 1933.12.7:7)。<sup>①</sup>長途の遠征(日本競技会初めての経験、競技に及ぼす影響は甚だ大きい)、<sup>②</sup>気候風土の変化(ペルーは日本の3月、ブラジルは陽春4月)、<sup>③</sup>雑務(旅行中に随伴する雑務を負担、住吉君はその上諸事務を遂行)、<sup>④</sup>歓迎会せめ(歓迎会も多すぎると苦痛)、<sup>⑤</sup>試合場においての不利(言語が通じぬため不便が多い、選手の記録が不明なため勝負の目途がつけにくい)などである。「親善」が目的だったとはいえ、選手の目標は優秀な成績をあげて帰国することであった。ところが、どこに行っても歓迎会が続き練習時間もなく、思うような成績を残せなかった大島は、後に続く選手らがその時の経験を海外遠征に生かせるように記したのではないかと筆者は考える。なお、出発前に予定していたロサリオ(アルゼンチン)での競技会は中止となり、さらに住吉が帰途コロンビアに立ち寄ることは実現しなかった<sup>30</sup>。

表2は南米遠征の日本選手団の足跡(1933年6月20日～11月5日)を整理し、まとめたものである。出発時未定となっていた競技会は、様々な理由から遠征途中で予定変更を余儀なくされていた。今回、外務省記録と二次資料を照合し本遠征の足跡の全容はほぼ明らかになった。

表2 日本選手団南米遠征の足跡(1933年6月20日～11月5日)

滞在国	月日	選手行動	その他
日本	6月20日	横浜港出帆(日本郵船・楽洋丸)	
アメリカ	7月02日	ホノルル寄港	
	11日	サンフランシスコ到着	2泊滞在
	22日	ロスアンゼルス港到着	1泊滞在
パナマ	26日	パナマ港到着(11時)、国立学院運動場で練習	国立学院総長(全駐英公使文相・メンドスベイヤ氏の好意)
ペルー	8月01日	サラベリー寄港(14時)、日本領事館で茶会列席、県知事、市長表敬訪問	トリヒヨリ市で公開練習、移民会館で同胞と歓談
	2日	ワチョ寄港 電車→20時カリャオ港へ向け出発	練習

	3日	カリャオ港到着、ペルー代表ほか楽洋丸出迎え（朝8時）、直行便でリマ市へ	コルメナ駅で歓迎、ホテルボリバル投宿、広島出身選手歓迎会出席
	4日	午前中市内観光→ペナビデス大統領表敬訪問→ホテルで歓迎会→国立競技場視察→昼食（ホテル）→同胞と歓談→コメルシオ新聞社（18時本社）訪問、部署視察→夜に日本国公使招待夕食会	軽い練習
	5日	日秘国際対抗陸上競技大会（1日目）14時半開始、夜ホテルで歓迎招宴	共催：ペルー陸連、中央日本人会、日本人スポーツ協会
	6日	日秘国際対抗陸上競技大会（2日目）15時15分ペナビデス大統領到着→夜10時カリャオ港から楽洋丸に乗船→チリへ	朝隈選手走高跳で南米新記録（1m95）
チリ	11日	アメリカ上陸→飛行機で移動→ロス・セリヨス空港（13時半）到着→日本公使館訪問→陸軍士官学校訪問→新聞社訪問	クリヨン・ホテル投宿
	12日	陸軍競技場視察（9時～）、大統領、外務大臣、サンティアゴ市長他訪問	
	13日	チリ陸上競技大会（1日目・サンティアゴ陸軍競技場）	110m障害南米記録保持者サリナスと福井、観衆の注目
	14日	休息	
	15日	チリ陸上競技大会（2日目・サンティアゴ陸軍競技場）	
	17日	サンティアゴ出発	汽車で移動
アルゼンチン	18日	ブエノスアイレス・レティーロ駅着（18時半）→各新聞社訪問	ジュステンホテル投宿
	19日	午前中、公使館・領事館訪問、15時ヒムナシアクラブ競技場見学、公使官邸レセプション（18時～）	
	20日	在アルゼンチン日本人会歓迎会（14時～）、日本人テニスクラブレセプション（18時）	
	21日	YMCA 歓迎会（18時～）→、テアトロ・アベニダで観劇（22時）	
	22日	ヒムナシアクラブ歓迎レセプション（18時～）	
	23日	大学クラブ歓迎レセプション（18時～）	※ロサリオ行は中止
	26日	ブエノスアイレス陸上競技会（1日目）14時～→プリンス・ジョージ・ホールで歓迎会（18時～本邦陸上選手歓迎委員会主催）	朝隈足を痛め不出場、大島も欠場
	27日	ブエノスアイレス競技会（2日目）14時～、交歓会（ヒムナシアクラブ主催）	藤枝800mで日本新、住吉やり投げで南米新
	28日	晩餐会（公使招待）	
	29日	13時～送別午餐（領事招待）、晩餐（大学クラブ招待）	
	30日	フランス国船マッシリア号に乗船（ブエノスアイレス11時）、サントス港に向け出発	
ブラジル	9月02日	サントス港着（16時20分）→潮旅館着（17時）、サントス委員会歓迎ランチ、自動車でサントス発（18時30分）→サンパウロ・セー着（20時40分、内山総領事他出迎え）→ラジオ放送局で挨拶（住吉）→各外字新聞社訪問	パレスホテル投宿
	3日	午前中、日本領事館、邦字新聞社、各運動クラブを訪問、内山総領事、官舎で招待歓迎会（19時）	パウリスターノクラブで練習（16時～）
	4日	午前中、市内の各大学訪問、後援会主催歓迎会（19時～21時、内山総領事、サンパウロ日本人会、サンパウロ青年会等各代表挨拶、福井答辞）	16時～練習



	5日	11時内山総領事の案内で執政官サーレス執務官訪問(15分)→ガゼッタ新聞社(スポーツ新聞社)、デアリオ・ポプラーレ新聞社訪問→練習後お茶の会に出席	午後は雨のためパウリスターノ運動場での練習中止、YMCA屋内運動場に変更し軽く練習
	6、7日	第2回全伯邦人陸上競技大会参観、パウリスタ陸連本部歓迎の宴	
	9日	サンパウロ国際競技会(日伯対抗競技大会・1日目)パウリスターノ競技場、内山総領事夫妻(13時半)臨場、次いで第二軍団司令官代理カストロ大尉着席。開会宣言(14時半)	大島・走幅跳優勝
	10日	サンパウロ国際競技会(日伯対抗競技大会・2日目)	バジリア400m障害・南米新で優勝、福井日本新で2位、住吉やり投げで南米新、大島・三段跳で、朝隈・走高跳で共に優勝
	11日	パウリスタ・トリアノンでレセプション。夜、労働会館で選手一行の講演会(サンパウロ青年会主催)	
	12日	カンピーナス市(14時半)自動車利用、東山農場訪問(18時)19時30分カンピーナス市の水泳、ボート協会主催ダンスパーティー(19時半)、24時解散。住吉のみリベロンプレート市訪問	カンピーナス市訪問:住吉、福井、大江、朝隈、大島、藤枝不参加、住吉以外は帰郷。リベロンプレート市:住吉直行
	13日	住吉リベロンプレート市長訪問、コメルシオFC招待で競技会出場。晩餐会出席。帰郷組(福井、大江、大島、藤枝)の4選手は、汽車でリオデジャネイロへ先発(21時)	軽い練習(帰郷組)
	14日	住吉選手リベロン、ガタバラ耕作地コーヒー栽培施設見学。訪問後帰郷。朝隈はサンパウロで住吉を待つ。	
	15日	先発組4選手リオデジャネイロ到着(9時半)、リオ陸連歓迎、大使館の車でホテルへ	先発組:大江、福井、藤枝、大島
	16日	後発組2選手は、サンパウロ市「富田屋」で広島県人会の集いに参加(20時~)	後発組:住吉、朝隈(広島県出身者)
	18日	後発組2選手、7時40分ノルテ駅発リオ行の汽車乗車、リオに向け出発	内山総領事、サンパウロ陸連プリニオ氏、邦字新聞社代表見送り
	20日	リオデジャネイロ陸上競技会(バスコダガマ競技場)、14時15分開始(住吉、朝隈は、朝、リオデジャネイロに到着)	藤枝力闘、高官多数出席
	21日	林大使夫妻招待レセプション(17時~)	リオ各ボルトガル語新聞、ブラジル側関係招待
	22日	在留民の歓迎宴、海軍飛行場見学、飛行機でリオ見物(伯国海軍側好意)	
	23日	リオ出発(米船デルスール号)→ニューオリンズへ	
アメリカ	10月11日	ニューオリンズ着→ロスアンゼルス(鉄道で大陸縦断)	
	16日	ロスアンゼルス港出帆(日本郵船・太洋丸)	
	24日	ホノルル寄港	
日本	11月05日	横浜港着(早朝)→横浜「八百政」で陸連平沼会長の歓迎会に臨む、午後皇居遥拝、明治神宮帰国報告参拝	帰国

※移動、練習、休養、行事のない日は、日付を省略している(太字は競技会参加または参観)

#### IV. 遠征の成果

日本選手団の遠征の成果は、いかなるものであったのか。サンパウロの内山総領事が日本政府に伝え

た本遠征の目的は、「日本移民渡伯25周年記念祭」事業に日本陸上界のトップ選手を慶祝使節団として

迎え、「日伯青年との親交」を温め、ブラジル社会に対する「日本宣伝」だった。ブラジルの邦人間ではロス五輪で日本人選手の優秀性を世界に知らしめたことを称賛していたが、邦人移民の中には選手団招聘計画に不満を持つものも少なからず存在していた。その主な理由は「『選手来伯計画実行の手続きの順番が違う』<sup>31</sup>、『不況下で寄付金集めは認識不足』<sup>32</sup>」（日本新聞 1933.6.28：1）というものであった。特に選手団の経費を賄う寄付金集めに関しては、邦人間で厳しい意見がでていた。日系の新聞でも「25周年祭で田舎からナケナシの金を絞り上げた今日、更に運動競技のために金を出せといったって、おそらく出すものは特殊の人以外にはあるまい。（中略）。／内山君（総領事）があくまで一般の寄付金で押し通し、足りない分は30コントでも40コント<sup>33</sup>でも自腹をきるだけの度胸を決めているのなら、こちらの認識不足、自己の不明を謝すであろう」（日本新聞 1933.6.28：1）と厳しく批判していた。

その一方で在留邦人たちは日本選手の来伯を心待ちにしていたようだ。「運動外交によって行われるべき、無私の心境に在る人間の持つもっとも美しき交歓こそ、真の日伯親善を語り得るもの。（中略）。／日本よりの選手を迎えて、実地コーチに預かり得るならば邦人陸上競技界も、1933年度を期して一新世紀を画することであろう」（日本新聞 1933.1.1:不明）と期待を膨らませている。その背景にはロス五輪で北米に示したように、日本人の優秀性をブラジル社会に広く知らしめたいという、在留民の思いがあった。

日本人が世界の檜舞台に立って自ら優秀を以て、自惚れている白人共の度肝を抜くことは痛快である。（中略）。世界的選手をブラジルに招待し、その妙技を伯人に目の当たりにみせることは、平生日本人といえどエンシャダー（鉄）を振ることしか知らないものと思込んでいる者どもを驚かさずばかりでなく、（中略）、国民外交の実を挙げ、日伯親善を推進する点において大いに効果があると思う。（日本新聞 1933.6.28：1）

結果は期待以上であり、在留民たちは「日本選手が『伯国人』に与えた印象は、日本人の真価を彼らに了知せしめるに興って力あるものである」（日本

新聞 1933.9.13：1）と選手らを称え、日系新聞各社の論調も同様のものが多かった。大会の様子を詳細に掲載した雑誌「農業のブラジル」（1933：134-135）には、「選手らは長旅の疲れもあり、練習も十分にできないハードなスケジュールの中、体調不十分で臨んだ2日間の競技であった。（中略）。／非常時日本の青年、立派な代表者として多難なる母国を背景に深い意味を持った国民外交としていかんなくその責務を果たすことができたことは、歓喜に堪えない」と選手団来伯の成果を述べている。更に「今まで公式或いは非公式にずいぶん沢山の人が南米訪問をしたが、その中、真に日本帝国を代表してきたものは果たして幾人あったか。然るに彼ら6名の学徒訪問はスポーツの明朗なる精神を以って、日伯の友誼親善を計ることができた」（農業のブラジル 1933:135）と記している。

懸念されていた寄付金集めは、大会開催前に定額を達成できず、選手歓迎後援会は寄付金申し込み締め切り日を更に延長する苦しさだったが（伯刺西爾時報 1933.9.9：3）、大会中に寄付が続き、最終決算では全収入（62,237,400ミル）の内、在留民による寄付金は46,208,700ミルに達し、約7割半が寄付で集まった。会計係の瀧本徹雄副領事は、「在留邦人が46コントス余の寄付をして熱意を示したことは、いま更に深い感銘を受けるものがある」（伯刺西爾時報 1933.10.11：7）と話し、邦人の結束と熱心な後援の成果だとしている。

日本陸連側の成果も大きかった。2種目において日本新記録が樹立され、同時に邦人移民のみならず現地スポーツ関係者と交流したことで、大いに国際親善の成果をあげて帰国した（山本 1982：40）。本遠征が「オリンピック優勝8年計画」を視野に入れたスタート年であったことを鑑みれば、派遣された6名の選手の内、1936年のオリンピック・ベルリン大会には役員・コーチ、選手として5名が参加しており<sup>34</sup>、織田がいうように本遠征の経験が選手に有益な結果をもたらしたといえる。

では、日本政府は遠征の成果をどのようにとらえていたのか。日本選手団のブラジル訪問は、在留民が確信していた「日本男子特有の麗しさ」を期待通りに発揮し、現地の人々に好印象を与えたことで内山総領事は「スポーツ外交の勝利」（伯刺西爾時報 1933.9.2：1）と評している。外務省も現地からの報告で、選手団が南米社会及び日本人移民に与えた

影響の大きさを感じていた。重光葵外務次官は、11月7日午後12時半から霞が関の外務次官官邸に帰国した6人の選手を招いて帰朝歓迎会を催し、在京外交官をはじめ多くの関係者が出席した中で選手らの労をねぎらった。

一方で、ブラジル国内の政治的側面からみれば、1934年10月に外国移民入国二分制限法が制定され、「外国移民で最も大きな打撃を受けたのは日本人だった」（広島県 1993）。ブラジル国内の排日思想に対して、スポーツが有益であったと外務省に報告した内山総領事だったが、日本選手団の来伯は一時的な高揚をブラジル社会にもたらしたものの、日系移民とブラジル社会のコンフリクトに有効に機能したとは言い難く、選手団の訪問が在留移民の生活に有利に働いたとはいえないだろう。つまり選手団の来伯は一過性の出来事に過ぎなかったともいえる。しかし本遠征は長期的（歴史的）にみれば、大きな成果があったと評価する声もある。当時、聖州新報の記者として競技会及び選手らを直接取材した内山勝男氏は、以下のように語っている。

日本とブラジルの親善の口火を切ったのは、この選手団一行ですよ。1930年代に（スポーツ交流の）機会をつくったこの連中がまた種が（その後）大きく実ってね、それが一つの成果です。競技でも（日本選手の）最後まで頑張るといふ行動が（人々に）非常に好感を与えたんです。本当に日伯親善の意味を果たしたんです。（ポルトガル語で書かれた）現地の新聞もよく書いてくれました。そこまで書いてくれるとは思わなかった。非常に好意的でしたよ。（筆者インタビュー：2003年9月11日）

さらに内山氏は「ブラジル側のパジリアが福井さんと一騎打ちをやって僅かな差でパジリアさんが勝ってね、満場が非常に感激した場面があったんですよ。このことがパジリアさんの日本に対する親善の第一歩になったわけです」と語っている。内山氏の話は、この時の「縁」がその後も続いたことを示唆している。

派遣選手として在留民から最後まで派遣の要望があった南部は、1939年に半年間ブラジル各地のコロニアをコーチとして回り、その際パジリアとも会いブラジル陸軍の選手を指導した。このことがき

かけとなり、南部は1951年に日本陸上選手団を率いて再び渡伯している。「南部を招聘したのはパジリアで、戦後の日系コロニア陸上界の一本立ちへと発展した」（パウリスタ新聞 1986.6.21：6）といわれている。南部が渡伯する前年（1950年3月）にパジリアは、古橋広之進選手を有する日本水泳チーム（5名）をブラジルに招待している。

1933年の「南米派遣日本陸上選手団」の遠征から始まった日伯スポーツ交流は、当時、選手として大会に出場したブラジルのパジリア選手を介して、戦前・戦後の長きにわたり日伯両国のスポーツ界に少なからず影響を与え続けていったのである。

## V. おわりに

本稿では国内・国外に残された資料を手がかりに、1933年に南米に派遣された日本選手団の足跡を追い、数少ない貴重な証言も含めて様々な角度から遠征の全容にできる限り接近し、遠征がもたらした成果に関して検証を試みた。その結果、大義として掲げられた遠征の目的以外にも、各組織や団体の個別の目的がみえてきた。また遠征の足跡とスポーツ親善（交流）の成果を明らかにする中で、本遠征が戦後の日本とブラジルのスポーツ界に、少なからず影響を与えていることがわかった。本遠征が戦後の日伯スポーツ交流に与えた具体的な出来事に関しては、別稿で詳細を明らかにしたい。

最後に、移民史などの文献には年月日の間違いが散見されたことから、選手団の足跡を調査し確認する上で現地の新聞は欠かせなかったが、南米諸国の戦前の日系新聞及び現地新聞には欠番、欠損が多くみられ、そもそも保存がなされていない国（特にアルゼンチン）もあった。また、2003年に現地での事前調査を実施してから再調査までの期間が空いたことで、当時を知る直接的証言者への聞き取り調査が限られてしまったことや、現地新聞記事も一部で収集できなかった点が課題として残された。

## 謝辞

ペルー及びチリの現地新聞記事の収集、翻訳に関しては、広島市立大学国際学部名誉教授の故・友枝啓泰氏に、資料収集では立命館大学名誉教授の岡尾恵市氏、広島ペルー協会専務理事の小田和美氏にサ

ポートを頂いた。本遠征に代表選手として派遣された故・朝隈善郎氏には、生前、長時間のインタビューの機会と資料提供を頂いた。また現地調査に際しては、東山農場 (Fazenda Tozan do Brasil Ltda.) 取締役社長・岩崎透氏、南米日系移民の皆様、北海道ブラジル協会など多くの方々にご協力を頂いた。ここに記して心からお礼申し上げます。なお本稿は2014年日本体育学会岩手大会・専門領域「体育史」で発表(曾根 2014)した際の助言をもとに、さらに追加調査を加え加筆・修正したものである。

本研究は、平成26年度科学研究費補助金(挑戦的萌芽研究 課題名「戦前の日伯スポーツ交流が1964年東京五輪の招致決定に与えた影響」課題番号:26560355)の研究成果の一部である。

## 注

- 1 本稿では、特に「親善」「国際交流」を目的としたスポーツの「遠征」に関する研究が少ないことを指摘している。「南米派遣日本陸上選手団」の遠征に関しては曾根(2005)がある。
- 2 ただし、1914年(大正5年)に講道館6段前田光世、7段伊藤徳五郎、5段佐竹信四郎、同じく5段大野秋太郎の柔道選手団4名が渡伯し、北米からチリ、アルゼンチンを柔道行脚しブラジル各地を転戦した。しかしこの興行は、講道館の主旨に反するものとして嘉納治五郎師範の怒りに触れ破門されたことから、公式な日本代表選手による南米遠征とはみなされなかった(池田重二 1968:97-98)。
- 3 パウリスタ新聞(1986.6.21:6)には、「1908年に笠戸丸でサントスに第一歩を印した日系人を、陸上競技を除いては語れないだろう。それほど陸上競技は日系のみならずブラジル人との間のつながりも深く、(中略)あらゆる分野への日系の進出、経済界での貢献も見逃せないが、その歴史の一ページを飾るのが、陸上競技だろう」、「スタートは1931年」とある。ブラジル日系社会の初期段階では、コミュニティをまとめていくうえでもスポーツ(特に陸上競技)の果たした役割は大きく、初の日本選手団来伯はブラジルスポーツ界発展の礎となった、と記されている。
- 4 派遣選手だった朝隈善郎が書いたコラム(日本陸上競技連盟70年史編集委員会 1995:158)や、陸上競技史(山本 1979:40)には、わずかに遠征の記述がある。派遣選手だった大江季雄の青春を描いた、結(1991:89-109)の小説では船内の様子や競技会などに触れている。南米移民の過酷な生活を描いた北(1986:160-161)の小説には、日本選手団訪伯の実際の出来事が挿入され、日系社会の反応などが書かれている。日本の豪華客船の歴史とエピソードを綴った佐藤(1993:63-67)にも、楽洋丸に乗船した派遣選手の逸話が出てくる(文中で南部忠平が遠征に参加した、となっているのは間違いである)。いずれも本遠征の記述は断片的なものである。
- 5 国立公文書館 歴史公文書探究サイト「ぶん蔵、『日本陸上選手団、南米遠征』」では、ロサリオに行ったことになっているが、実際は競技会が中止となり選手団は当地を訪問しておらず、日付に間違いも見受けられる。[http://www.bunzo.jp/photos/090mojocafe/nanbeichizu\\_l.jpg](http://www.bunzo.jp/photos/090mojocafe/nanbeichizu_l.jpg) (閲覧日:2015.02.24)
- 6 外務省記録(I.1.12.0.2-1)には、南米派遣日本陸上選手に関する記録(昭和8年1月23日から昭和9年2月23日)と、南部忠平の渡伯に関する記録(昭和13年11月14日から昭和14年6月20日)が単巻でまとめられている(Ref.B04012488900)。昭和14年6月3日の南部忠平渡伯に関する記録は(Ref.B04012489100)。
- 7 筆者は、日本選手団を当時直接取材した内山勝男氏への聞き取り調査を2003年9月11日に実施した(サンパウロ新聞社にて)。面接終了後は忠実に録音テープを起しデータとして使用した。内山勝男は1910年生まれ、新潟県出身、サンパウロ在住。20歳で自由渡航者としてブラジルに単身移住。植民地生活2年後に聖州新報記者として入社。インタビュー当時は93歳だったが、その3か月後に逝去された。内山氏への聞き取り調査は、遠征の結果を考察する上で貴重な直接証言となった。
- 8 その他の主な意味と表記は、以下の通りである。秘露(ペルー)、智利(チリ)、亜爾然丁(アルゼンチン)、伯刺西爾(ブラジル)、日秘(日本とペルー)、日伯(日本とブラジル)。新聞記事はタイトルが長く引用も多いため、掲載面のページのみを記した。
- 9 当時の中南米への移住者数をみると、選手団の訪問国の中で最も日系移民の多かった国はブラジル(1908-1933)143,564人、次にペルー(1899-1933)30,408人、アルゼンチン(1907-1933)3,665人、チリ(1903-1933)473人となり、4か国の移民総数143,546人の約8割がブラジルへの移民だった(今野・藤崎編 1994)。
- 10 日本移民ブラジル初の入植地である平野植民地では、8月13日に25周年を記念して小学校に日本からオルガンを購入したり、日本選手来伯により植民地内で寄付金を

募集したりしている(平野植民地日本人会 1941)。ちなみに25周年記念祭の呼称は様々だが、引用では先の文献の記述に従った。

- 11 安養寺顕三氏(1903-1939)。京都市生まれ。市立実習商業学校卒業後、京都武徳会で柔道や水泳などに励み、水泳では極東オリンピック大会の予選にも出場。1927年3月に自由移民として渡伯。日伯スポーツ親善に尽くした最大の功績者といわれている。日伯新聞に「安養寺が選手と同行しなかったことは、すこぶる遺憾であった」と書かれているのは、そもそも安養寺は世話係として、選手団と同行して楽洋丸で渡伯することになっており、外務省から在京南米5か国の公使館に発送した「南米派遣選手に便宜供与依頼の件」(外務省記録1933.6.19)にも、6名の派遣選手と共に安養寺の名前が日本語で記されていた。しかしポルトガル語の訳文には名前がなく、これ以降安養寺の名前は出てこない。安養寺が同船しなかった理由は、マネージャーとして同行するつもりで横浜まで出かけたところ、選手以外の人には旅費が出せないと日本陸連が言いだし随行できなかつたと、安養寺の親友だった泉換氏(大阪商船)が述懐している(日本移民五十年祭委員会 1958: 8-9)。
- 12 水泳選手も招待することに関しては、その後進展したとの報道はみあたらない。ただし、1935年に水泳選手だった斎藤巍洋(1903-1944)が伯国海軍の水泳コーチとして招聘されている。
- 13 実際に派遣した選手6名は、以下の通りである(提出されたプロフィール)。
- ・福井行雄(31歳、110m障害、400m障害)、岡山県出身、東京高等師範卒業、満鉄、松江中学教諭。
  - ・住吉耕作(26歳、やり投げ、五種競技)広島県出身、呉中学、早稲田大学学生。
  - ・大島鎌吉(25歳、三段跳、走幅跳)石川県出身、金沢商業、関西大学学生。
  - ・藤枝照英(24歳、400m、800m)奈良県出身、砥城農業、関西大学学生。
  - ・大江季雄(20歳、棒高跳)福井県出身、舞鶴中学、慶應義塾大学学生。
  - ・朝隈善郎(19歳、走高跳、走幅跳)広島県出身、府中中学、日本体操学校、明治大学学生。
- 14 派遣候補選手は、南部、吉岡、中島、北本、大島、西田、住吉の7名で、残り1名の具体的な名前はあがないない。
- 15 吉岡隆徳(1901-1984)明治42年生まれ、島根県出身、東京高等師範学校卒、ロス五輪100m6位、昭和10年

10秒3の世界記録樹立。「暁の超特急」の異名をもっていた。

- 16 日本陸連はロス五輪に出場した選手の経験をもとに、1940年の東京五輪にそなえる根本方針として1933年1月に「オリンピック優勝8年計画」を立て、この年を実施の1年目とし、陸上競技の普及や優秀選手の発掘を目的とした巡回コーチなどに着手した。そのため陸連の組織を再編したが、「専門委員会を設置するなど意欲的な面も見られたが、陸連内部の紛争でせっかくの将来計画も絵に書いた餅といえる状況で、記録の進歩発展もやや停滞の感があった」(山本1982: 40)と述べている。なお「オリンピック優勝8年計画」の名称は様々だが(例えば「8年計画」「8年強化計画」「8年強化策」)、日本陸上競技連盟七十年史編集委員会(1995: 685)に記されている名称を使用した。
- 17 織田幹雄は選手の南米派遣に対し「選手ができるだけ多くの機会に、国際競技の場数を踏むことはきわめて必要であり、勝利の栄冠を掴んで帰ることは指針を強めることになり、次のオリンピックへの試練として有意義」と賛成をしている。一方、連盟関係者以外で遠征に反対していた者は、「南米あたりに行っても何ら意義はない。殊に50年祭(25年祭の間違い)の余興みたいに扱われたりしたら、見物同然で、遠征に多額の費用をかけるのは無駄だ、目標を米国に置くべき」(読売新聞1933.2.22: 5)と主張した。「陸上連盟はオリンピック8年強化計画をうちたて、アメリカを目標の鼻息荒い強化のスタートを切った」(織田1997: 140-141)ばかりだったため、反対派は選手の「経験」よりも「実益」を重んじたと考えられる。
- 18 この時点で代表選手として推薦を受けたのは、南部、住吉、藤枝、大江、朝隈である。ただし多少の変更があるかもしれないとし、南部が不可能な場合は、大島を推薦、監督としては日本陸連常務理事の森田俊彦氏が指名されている。10000mは6月11日に東京で行われる一般対学生競技会の成績により推薦するとした(大阪朝日新聞1933.5.30: 7)。
- 19 福井は派遣選手に選ばれた後、「渡航手続きのため17日朝久々で岡山県高田郡高田村に帰郷したところ、はからずも本籍地高田村役場で松江63連隊から、来る7月17日より教育召集令状を受けているとわかり、渡米を目前に控えて軍国非常時の教育召集と記念すべき国際スポーツ競技出場の間端に立って面喰っているが、結局前例のない国際競技会出場を理由として、延期手続きを取るはず」(東京朝日新聞 1933.6.18: 3)という状況にあっ

- た。
- 20 送別会にはアルゼンチン公使モンテネグロ氏、筒井外務省情報部次長、陸連の森田理事、山口理事から送別の辞が述べられ一行を激励した（東京朝日新聞 1933.6.21：2）とある。
- 21 派遣選手の一人だった朝隈善郎は、日本陸上競技連盟七十年史編集委員会（1995：158）のコラムで「11月3日に全員無事帰国した」と書いているが、正確には11月5日である。
- 22 現地新聞のエル・コメルシオは、南米大陸最古の新聞である。在留邦人関係の諸問題にも偏見をもたず常に公平な態度で中傷的な記事を掲載せず、日本及び在留邦人に対する理解促進に協力を惜しなかつたといわれている（在ペルー日系人社会実態調査委員会編 1969：194）。当時、ペルーの日系新聞は「秘露時報」（1929年7月創刊）、リマ日報（1930年1月創刊）の両紙が発行されていた。選手団がカリヤオ港に到着した際には取材に向いていたが、新聞は現存していない。
- 23 ヒムナシアクラブは、国際ラグビー競技や競馬で使用される当競技場の持ち主である。
- 24 ロス五輪を視察に行った安養寺は、最初に選手村に到着したアルゼンチン陸上第1班を訪ね、ファン・カルロス・サバラ選手（ロス五輪マラソン優勝）らと親しく話した様子を報告している（日伯新聞 1932.11.4：4）。以前から、安養寺が南米及び日本のスポーツ界と懇意にしており、交友関係が広がったことがわかる。
- 25 選手団のサントス入港に関しては、日伯新聞では9月2日午後4時20分、日本新聞でも9月2日午後4時半と報じられ、外務省記録（1933.9.20）には9月2日予定より遅れて入港と記されている。伯刺西爾時報（1933.9.6：7）には、「3日午後4時20分雲低きサントス埠頭に、遂にその雄姿を見せるに至り」と書いているが、これは記事の日付け間違いである。
- 26 シルビオ・デ・マガリャンエス・パジリア（Sylvio de Magalhaes Padilha, 1909-2002）は、オリンピック陸上400m障害ブラジル代表、1932年ロス五輪（5位）、1936年ベルリン五輪（5位）出場。引退後ブラジル陸軍将官、国家スポーツ評議会副会長、ブラジル国際オリンピック委員長、陸上、水泳など多くの競技団体の会長職を歴任し、1964年からIOC委員（No. 267）となった。戦前には邦人スポーツ界の理解者として支援を惜しまず、パジリア氏の名前を付した野球場もできている。戦前、戦後を通じてブラジルスポーツ界に大きな影響力を發揮した。1968年「明治100年記念」を機に日本政府より勲四等旭日章を受章している。
- 27 藤枝だけが不参加だった理由は定かになっていない。中距離種目が専門だった藤枝は、疲労回復と練習不足を解消するためサンパウロに残ったと推測する。
- 28 「農場日誌」の詳細に関しては、柳田（2009）を参照されたい。
- 29 池田信雄は明治36年（1903年）生まれ、広島県沼隈郡松永町出身（進藤・山下編 1959）で芸能関係者といわれているが詳細は不明である。またYociomi Kimura（木村義臣）は、東京大学卒業後、自由移民として渡伯、日伯新聞社に入社、のちにパウリスタ新聞の編集長となる。第1回全伯陸上競技大会で競技運営担当として決勝審判員を務めている（ちなみに同行した東後一美は、計時員として運営を担当）。日本選手団来伯時は通訳として選手に同行したと思われる。
- 30 外務省記録（1933.8.30）には「住吉が帰途コロンビアに赴くために入国手続き、同国滞在中の便宜供与などを願ひ出ているので配慮してほしい」旨を内山総領事に依頼している。総領事からの返事には「アルゼンチンの競技会収入が少なく、住吉のコロンビア行旅費は支出できないので、貴方で支出の見込みはないか取り計らってほしい」（外務省記録 1933.9.6）とある。その後、日本陸連からは「コロンビア行は『招聘』によるものと信じ許可したが、当方にて旅費の負担できず」（外務省記録1933.8.30）との文書が届いた。当時、コロンビアへの邦人移住者は108人と少なく（今野・藤崎 1994：360-361）、住吉のコロンビア訪問の理由や経緯に関しては不明である。
- 31 手続きの順番が違うとは、以下のことを示している。「昨年（1932年）2月中旬に『日本人移民渡伯25周年祭』挙行の下相談のため、内山総領事は主なる在留者を集め選手招待を座談的に切り出したが、その際に経費の話でゆき詰まり、まとまらず終わっている。その後2、3回会合があつたが選手招待の話はなかつたので、不景気のため計画中止かと思つていたが、母国の新聞報道では内山総領事が外務省を通じて日本陸連に熱心に交渉中で、連盟もこの機会に是非南米を訪問したいと協議しており、人選も決定していることを報じていた。その時もサンパウロでは依然として何の相談もなかつた。それにも関わらず2、3日前にサンパウロ青年会代表の名前で、日本陸上選手の南米訪問が決定したので、その費用50コントスの寄付金募集に援助してくれという意味の手紙を送ってきた」（日本新聞 1933.6.28：1）ことであり、一部の関係者だけで招聘計画が進んだことに対する不満

が、寄付金の件で表面化したと考えられる。

- 32 認識不足とは以下のことを示している。「青年会の名で50コントスの大金（この不況時には実際大金である）が一片の勧誘状を以て集められるものと信じたに違いない。さればこそ去2月から今日まで4か月以上、邦人の中心地たるサンパウロの誰人にもこの費用について一言の相談もしていない。（中略）内山総領事は奥地を巡視してきたのだから、邦人独立農の大部分が珈琲シチアンテ（小農場主）であり、一俵78ミルの今日ではその日暮らしも立てかねていることも知らないはずはない。（中略）かけっこや高跳びの上手な青年が来たから寄付をしろと言っても、この不況時ではよい顔はしまい。既にサンパウロでも困ったことだといっている」（日本新聞1933.6.28：1）と批判していることである。
- 33 当時、ブラジルの貨幣単位は一般的に「ミルレース」で（略して「ミル」ともいった）、選手団収支決算報告書では、1ミルは邦貨で約30銭として計算している（なお1,000ミルは1コント）。
- 34 本遠征に派遣された6名の選手の内、第11回オリンピック・ベルリン大会（1936年）には、役員・コーチとして住吉（選手団・総務）、福井（コーチ）が、選手として大江（3位）、朝隈（6位）、大島（6位）が派遣されている。

## 参考資料

### 1. 一次資料

〈公文書〉

外務省記録(I.1.12.0.2-1)体育並運動競技関係雑件／南米派遣日本陸上選手関係 単巻. 外務省外交史料館.

〈聞き取り調査〉

直接証言者：内山勝男（93歳）. 実施日:2003年9月11日. 時間：9：45～10：35(60分). 場所：サンパウロ新聞社で筆者が直接聞き取りを実施）.

### 2. 二次資料

〈新聞〉

伯刺西爾時報（1931.3.5-1933.11.8）伯刺西爾時報社：サンパウロ.

日本新聞(1933.1.1、6.28、8.23、9.6、9.13、9.20、9.27、10.4、10.11)日本新聞社：サンパウロ.

日伯新聞（1931.1.8-1933.10.25）日伯新聞社：サンパウロ.

パウリスタ新聞（1986.6.21）パウリスタ新聞社:サンパウロ.

聖州新報（1933.9.12-9.26）聖州新報社：サンパウロ.

大阪毎日新聞（1934.9.19 朝刊）大阪毎日新聞社:大阪.  
大阪朝日新聞（1933.5.13-12.7 朝刊）大阪朝日新聞社：大阪.

東京朝日新聞（1929.10.12-1933.12.25 朝刊）朝日新聞社.聞蔵Ⅱビジュアル：東京.

読売新聞（1932.1.24-1933.11.10 朝刊）読売新聞社、ヨミダス歴史館：東京.

FOLHA DA MANHA（1933.9.3 -9.21）Empresa Folha da Manha SA：Sao Paulo.

EL COMERCIO（1933.7.31 -8.7）El Comercio Newspaper：Lima.

EL MERCURIO（1933.8.10-8.14）Empresa El Mercurio S.A.P：Santiago.

〈参考文献〉

蘆澤安平（1934）ブラジルの排日問題に鑑みて. 大正9年7月『東洋』37巻7号:拓殖大学創立百年史編纂室 編（2004）南米論. 拓殖大学創立100年記念出版収載, 拓殖大学：東京. 265-277.

池田重二（1968）在伯邦人産業・文化躍進の六十年. サンパウロ新聞社：サンパウロ, 97-98.

石井賢治（2013）第三章日系スポーツ史（1）陸上競技：ブラジル日本移民百年史 第4巻,第5巻（合冊）. ブラジル日本移民百周年記念協会日本語版ブラジル日本移民百年史編纂・刊行委員会編,トッパンプレス印刷出版：サンパウロ, 195-206.

嘉納治五郎生誕150周年記念出版委員会編（2011）気概と行動の教育者嘉納治五郎. 筑波大学出版会：つくば, 204-207.

北社夫（1986）輝ける碧き空の下で 第2部. 新潮社：東京, 160-161.

今野敏彦・藤崎康夫編（1994）増補・移民史1（南米編）. 新泉社：東京.

古園井昌喜（1996）戦前の北九州地方における企業内スポーツ研究 - 1930年の八幡製鉄所野球部台湾遠征について-. 久留米大学保険体育センター 研究紀要 第4巻第1号：東京, 33-37.

外務省調査部 編（1937）世界経済年報 第1巻:亜爾然丁国経済事情. 国際経済研究所：東京, 1-13.

平野植民地日本人会（1941）平野廿五周年史. 平野植民地日本人会：サンパウロ.

広島県（1993）広島県移住史 通史編. 広島県：広島, 459.

宮内孝知（1974）早稲田大学野球部第一回米国遠征に

- 関する一考察. 日本体育学会大会号 (25), 日本体育学会: 東京, 178.
- 南部忠平 (1976) 南部忠平自伝: ほるぷ自伝選集 スポーツに生きる19. マガジン社: 東京, 120-123.
- 農業のブラジル (1933) 農業のブラジル10月号 (第8巻第10号). 農業のブラジル社: サンパウロ, 134-135.
- 日本移民五十年祭委員会 (1958) 物故先駆者列伝: コロニアの礎石として忘れ得ぬ人々. サンパウロ人文科学研究所: サンパウロ, 8-9.
- 日本体育協会 (1986) 日本体育協会七十五年史. 日本体育協会: 東京.
- 日本陸上競技連盟七十年史編集委員会 (1995) 日本陸上競技連盟70年史. 日本陸上競技連盟: 東京, 158.
- 織田幹雄 (1997) わが陸上人生: 人間の記録15. 日本図書センター: 東京, 140-141.
- 東京市役所 (1939) 第12回オリンピック東京大会東京市報告書: 資料 東京オリンピック一九四〇—第十二回オリンピック東京大会東京市報告書 (2004) 収載. 日本図書センター: 東京.
- 佐藤早苗 (1993) 輝きの航海: 日本の客船とその時代. 時事通信社: 東京, 63-67.
- 関根隆範 (2013) 第三章日系スポーツ史 (1) ブラジルの柔道の歴史: ブラジル日本移民百年史 第4巻 第5巻 (合冊). ブラジル日本移民百周年記念協会 日本語版ブラジル日本移民百年史編纂・刊行委員会編. トッププレス印刷出版: サンパウロ, 216-224.
- 進藤憲吉・山下寛人編 (1959) ブラジル邦人人名録. 進藤憲吉: サンパウロ, 71.
- 曾根幹子 (2005) 南米派遣日本陸上選手団の軌跡—歴史的検証からみたスポーツ交流の意味と意義. 日本体育学会第56回大会予稿集, 日本体育学会: 東京, 170.
- 曾根幹子 (2014) 空白の日伯スポーツ交流—1933年「南米派遣日本陸上選手団」の遠征. 日本体育学会第65回大会予稿集, 日本体育学会: 東京, 83.
- 山本邦夫 (1982) 日本陸上競技史 (2刷). 道和書院: 東京.
- 山本喜誉司評伝編集委員会 (1981) 山本喜誉司評伝. サンパウロ人文科学研究所: サンパウロ, 18-19.
- 柳田利夫 (2009) 史料翻刻・「農場日誌」を通じて見たサンパウロ州護憲革命運動—カンピーナス東山農場所蔵「農場日誌」の紹介—. JICA横浜海外移住資料館 研究紀要3, 国際協力機構横浜国際センター: 横浜, 75-105.
- 横浜マリタイムミュージアム編 (2004) 横浜港を彩った客船 企画展. 横浜マリタイムミュージアム: 横浜.
- 結路一郎 (1991) リンデンの梢ゆれて—大江季雄の青春. 出版芸術社: 東京, 89-109.
- 在ペルー日系人社会実態調査委員会編 (1969) 日本人ペルー移住史: ペルー国における日系人社会. 日本人ペルー移住史編纂委員会: リマ, 194.